
うさてん。

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うさてん。

【Nコード】

N84810

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

幻想郷。全ての幻想を受け入れる世界で、許されることのない幻想の恋に落ちた。無名の哨戒天狗と、無名の妖怪兔の、語られることもない。幻想の恋のお話。

ある日、幻想郷が赤い霧に包まれる紅霧異変のまさにその時。そのささいな出来事は起き、出会はずのなかった二人は出会った。これはそんな、優しくて残酷な妖怪の恋物語。

幻想郷の世界観を借りた、オリジナルキャラばかりが登場する二次

創作小説です。

現在作者都合により長期更新停止しております。

プロローグ・I（前書き）

この小説は、東方projectでの「幻想郷」の世界を舞台に、本来東方シリーズには登場しないオリジナルのキャラのお話を書き連ねたものです。ほとんどオリジナルキャラでつつぱりです。主人公からヒロイン、脇役にいたるまでオリジナルキャラばかりですが、原作のキャラも一部です。なので特定のキャラが好きな方へはあまり向かない小説となっています。むしろ、「幻想郷」の雰囲気、というか、幻想郷にこんな話があったらいいなという作者の妄想から、「幻想郷」の雰囲気を感じたいという人向けかもしれません。

以上の事を踏まえたうえで、読んでいただけるといっ方はどうぞ。

プロローグ・T

うさてん。プロローグ・T

それはある日の幻想郷。

とある妖怪兔と、哨戒天狗が出会った。

全ての幻想を受け入れるこの世界で。

許されることのない、幻想の恋に落ちた。

優しくて、少し残酷なお話。

その日彼は、何か不吉な予感を得て、飛び起きた。
起きるなり障子を放ち、外の景色を見る。

その彼が見たのは、普段見えるはずの景色に一枚網がかかったような、紅く霞んだ景色であった。

それを見るなり、彼は刀をひっさげ、高下駄を履き、そのほかもろもろの装飾品をつけるなり、すぐに飛んで行く。

長屋のような建物から、瘦躯を天狗の装束で固めた男が出て行った。

「あつ、長春ちようしゅん！おーいつ！」

彼が文字通り、山を縫うようにして飛んでいると。誰かが彼の進行方向から飛んでくる影があった。

赤い霧で少し視界が悪かったが、彼の名を呼ぶその影が誰なのか、彼も既に把握つかしていた。

「おい、椿つばき。これは何があったんだ？」

向こうからやってくる影が、だんだんと天狗の格好をした小さな女の子の姿になっていき、彼の前にくるころには。彼の身長身長の半分からいしない身丈に、自分と同じ大きさの剣を背負った初々しい見習い天狗少女の姿があった。彼女は椿、というらしい。

「わかんない！日が昇ったらもうこうなってた！」

「ということは、昨日の夜のうちから始まったのか」

興奮しているのか、相手はすぐ近くなのだが大声で話す椿と、いたって冷静な長春。温度差があるようだが、話題は共通している。

二人の天狗を囲む景色は、薄い紅霧で霞んでいた。

視界を奪われるほどの霧ではないのだが、まあ見ていて気分のいいものではない。

「西北せいほくはどうした？今日はお前と当番だろ」

西北、というのはまた長春らと同僚の哨戒天狗の名である。

「うん、でも西北寝てたから。長春呼びに来たの」

「……たたき起こせよ」

長春はあきれて言い放った。

「うええ、でもわたしが起こしたら、後で何されるかわかんないよお」

椿は身震いしながらそんなことを言う。長春はため息をつきそうになったが、ひとまず思いとどまり。そもそもこの状況下で職務怠

慢をしてる西北を責めるべきだと考え直した。

椿は見習い哨戒天狗、西北は腐っても一人前の哨戒天狗だ。一種そういうことに厳格な天狗社会という奴の中では、逆らいがたい差ではある。

「まあいい、俺が叩き起こす。ほらっ、ついてこい」

長春はそう言っ、椿が来た方向へ再び飛び始めた。椿も後ろに続く。

彼ら哨戒天狗は、天狗の里の中では外の変化に敏感なほうである。長春もまた、その独特の臭いを嗅ぎ取っていた。

一筋縄では終わらなさそうな、異変の臭いを。

これが彼らの、後に紅霧異変と呼ばれる事件への最初の接触であった。

「おいっ、おい、おらっ、起きろ馬鹿」

長春と椿は妖怪の山の洞窟に来ていた。

普段は滝の裏にある洞窟で待機している彼らだが、いわば仮眠所のような形で別に洞窟が掘ってある。

入り口は一人がやっと通れる大きさだが、中はドーム状に広がっておりなかなか広い。座敷があり、畳の上に布団が乱雑に並べてあるだけの部屋であるが、寝るにはともかく不足はない。冬は防寒対策で出入り口に扉もつける。哨戒天狗の強い味方だ。

で、長春の目の前にこの部屋の利用率が異常に高い男が寝ていた。だが何度長春がゆすつても起きない。結構大きく揺さぶってみるのだが、それでも起きなかった。

その様子に、軽く舌打ちをした長春は。すぐ後ろにいた椿にさがるように言い、自身は立ち上がって、二、三步下がった。

そして、数歩の助走の後。長春は足を振り上げ——思いつきり、それにお見舞いした。

「ぐおおあっ!？」

布団に寝ていたそれはその衝撃に慌てて飛び起きた。

「いてえ！うがつ、ああつ、背骨折れた！ぜってえ折れた！くっ
そおいこら椿！んなことして許されると思って……！？」

飛んで起きた男が、わめきながら、ようやく側に立つ長春に気づ
いた。

「ああつ？長春？お前なんでここにいんだ？つか痛えよ」

「わざわざ起こしてやったのになんて口の利き方だよ、西北」

それに「頼んでねーよ、そして痛えよ」と答えたこの男が、葉走ははしり
西北せいほく。長春と同程度の高身長で体格もよい男である。背筋を伸ば
して立てば、ずいぶんと立派で力強い印象があるだろう。

ただし、性格は、推して知れである。

「あいてて…、人が気分良く寝てるってのになんて仕打ちだよ」

「馬鹿野郎。蹴られてしかるべしだてめーは、仕事しろよ」

「んだよ、どうせ侵入者なんて来ねーんだから。寝てようが寝て
まいが同じだろうがよ」

「だからダメなんだよ西北はさ」

「んだとオラア、椿もっぺん言ってみろコラ」

「事実だろうが、それと、」

長春は、椿に突っかかるうとする西北の首根っこをつかみ、多少
の抵抗を無視しながら、洞窟の外へと連れて行った。

「外見てから言え、この怠け者」

「ああ…？」

西北も、いっぱしの哨戒天狗である。

紅く霞んだ景色に、西北は目を走らせるや否や、あらかたの事は
理解した風で言った。

「紅いな」

「ああ」

「どっからだ、この霧」

「わからん、ひよつとしたら『奥』かもしれない」

『奥』とは、長春たちが哨戒している範囲の『奥』。つまり、天
狗の里内部を指す。彼らの主である大天狗や、天狗社会の中枢が位

置するところだ。

「河童か何かが、奥でなにかやらかしたのか？」

西北がやれやれと言った感じで言う。

河童などは、天狗の里内部にも入ることが許される数少ない種族の一つで、保守的な天狗社会でなにか起こるとすれば、そういった『友好種族』が引き起こすパターンも多い。

「たぶん、それはないと思うよ」

そうしたやり取りをしていると、突如上から声が降ってきた。と思うと、目の前に突然誰かが降りてきた。

長春たちの目前に降り立ったそれは、軽やかに着地を決めると。向き直ってこれまた軽やかな口調でこう言った。

「『奥』のほうは意外と落ち着いてるよ。どうせ外の異変だろうと割り切ってる感じ」

「侘助^{わびすけ}、わざわざ『奥』まで様子見に行ったのか？」

侘助、と呼ばれた爽やかな青年天狗は、にこやかな表情で首を横に振った。

「いいや、そのへん暇そうにしてた烏天狗をつかいつばさせたよ。そいつが嘘ついてなければ、正確な情報だと思うけど」

「…なんというか、お前らしいな」

屈託のない笑みでそう報告するのは、秋海棠^{しゅうかいどう} 侘助^{わびすけ}。西北や長春

らと同じく、哨戒天狗である。ただし彼は、なぜだか知らないが、哨戒天狗より上位のはずである烏天狗をよく使い走りにさせる、いくらかミステリアスな存在である。何かあるのだろうが、なにがあるのかはわからない。

「ねー、ならこの霧、なんなの？」

椿が耐えかねたように、長春の着物を掴んで言う。

だが、少なくとも事の真相を知るものはここにはいなかったたので、誰も何も言えなかった。

西北はだんまり、長春も苦い顔、侘助は笑っているだけ。

三人寄らば文殊の知恵。あれは天狗のための言葉ではなかったよ

うである。

「ごめんみんな！もう揃ってる？」

少し経ってから、『奥』のほうから駆けてくる影があった。

背に大振りの剣を背負い、哨戒天狗の装飾を身にまとった少女であつた。

その頃、ひとまず平常より外への監視を強めようということと、四人でうろつる哨戒していた長春たちだったが、その影に西北が真っ先に反応した。

「遅いぜ椈！」

「おい、お前だけには言われたくないだろ」

「ああ椈さん、待ってました」

「椈ちゃんだー！」

四者四様の反応を見せる中、その少女は四人の前で静止し。一人一人の顔を確認するように見渡した。

「全員揃ってる、か。よかったあ……」

いぬばしり もみじ

ほう、と安堵のため息をもらすのは、犬走 椈。彼女もまた、哨戒天狗の一人である。身長は長春と椿の間くらいで小柄だが、彼女は前出の四人とは一線を画す存在である。

背に負う大剣、左手には紅葉の紋が入った盾を持つ。他の四人は持ち方はどうであれ、皆刀くらいしか下げていないのだが、彼女だけ装備が立派である。

「おい椈隊長。おれたちやどうすりやいいのさ？」

西北がからかった口調で言う。

そう、椈は彼ら四人を統率する立場にある。いわば彼らの隊長のような存在なのである。

とはいえ、椈はそれを鼻にかけて気取ったようなところはなく、その上皆仲がいいので、特に明確な上下関係があるわけでもないのだが。

「んー、上からは何も言われてないから、待機ってことでいいんだと思うけど…」

椛が少し苦笑しながら言う。『隊長』なんて呼称は普段使われないからである。

「外の異変なら、まあお上は不干涉だろうからな」

「そうだね、まあ私たちもいつも通りでいいんだと思う」

長春の言葉に椛がうなずく。ひとまず対応は決まったようだ。

「なんだー、じゃあいつもと何も変わらないのー？」

「あほ、何か起こって欲しいみてーに言うなめんどい」

椿の残念そうな声を西北がこき下ろす。侘助は相変わらず爽やかな顔して突っ立っていた。

ひとまず、なにかお上から命令があった時に備えて待機ということになり。五人はそろそろと、いつもの待機場所——滝の裏にある洞窟へと、向かっていった。

特に急ぐ必要もないので、ゆっくりと歩いている一行であったが。長春だけが一人、なにか違和感を感じていた。

ただ一人、一行の最後尾で、しきりに後ろを気にしている。

「——？」

何か居るような気がして、長春は落ち着かなかった。

「すまん、椛。少し見回ってくる」

「えっ？ ああ、いいけど…？」

一応椛に断った上で、長春は紅い霧の空へと飛んでいった。椛は「なんで？」という表情を隠さなかったが、長春はそれを気にしなかった。

長春は五人の中で一番勘が良かった。

よく言えばこの勘は大当たりであった。この時確かに、彼らが探知すべき『侵入者』はいたのである。

いるだけなら、確かにいた。

もっともその『侵入者』は、彼ら五人になんら危害を加えるつもりなどなく、あまつさえ異変になどまったく関係なかったのであるが。

ただ一人、長春の運命のみを狂わせることになった。

いや、この先待ち受けたささいな出会いは。

大げさに言えば、幻想郷全体の運命すら、狂わせたのだった…。

プロローグ・I（後書き）

少し前からやろうと思ってた長編、やっと形にできたので歓喜しています。

東方原作キャラでなく、「幻想郷の一住人」たちの恋を楽しんでいただければと思います。

プロローグ・Ⅱ（前書き）

プロローグの別サイド。

ブローグ・U

うさてん。 - U

あたりがすっかり暗くなったころ。

普段なら大したものの音もせぬところを、ひた走る影があった。

無音の竹林を息を切らしながら駆けるその小さな影は、頭で対になっている大きな耳を振るわせて、ただ一生懸命に走っていた。

月明かりもない夜の話を、誰も居なかった上に、その少女はひどく急いでいたので。

まさか自分が紅い霧の中を走っているなど、思いもせずに。

その時はまだ、彼女の紅い夜目だけが、竹林で小さく光っていた。

「ちよつとー？てゐー？」

永遠亭の朝は早い。

月の兎である鈴仙にもそれは例外でない。彼女が師匠と呼び慕う八意永琳だって朝は早い、彼女もまた然りである。

だが、例外はそんな彼女のすぐ側にいたりする。

「てゐー！さつきから呼んでんでしょうが！いつまで寝てんのぉ！」
襖を開け放つなり彼女は叫んだ、——彼女がさつきから探している少女が寝ていると思われるところへ。

「なによぉ、うるさいなぁー。昨日は遅くまで遊んだんだからもうちよつと寝たっていいじゃない」

息を荒げながら入ってきた彼女とは対照的な態度で、布団をかぶって寝たまま応対する少女。

鼻息の荒い彼女を見ても、さして起き上がる気色もない。こちらを見る気配すらない。

その様子にさらにいらいらの募ったらしい彼女は、荒い息の上に語気まで荒くして言う。

「だからあ、なんであなたはいつもそんなぐーたら寝てられんの！他の兎もとづくに起きてるってえの！お師匠様だつてもう起きてんだし！その中であんなだけなんで寝てんのよお！！」

ずかずかと布団まで行き、ぱつ、と布団を剥ぎ取る。

「あー。」と、寝ていた少女はさして残念でもなさそうに、布団を取られるがままにしていたが、やはり起き上がる様子はなかった。「で、そういえば何の用なの？鈴仙があたしを探すなんてさ」しれつと、何事もなかったかのようにてゐは言った。

布団の上でごろごろと寝返りをうち、すっかりくつろいでいる。

鈴仙は半ばあきらめたようにてゐを見やり、ひとまず聞きたい事を聞いた。

「…あんたのわかる限りでさ、昨日兎が脱走したりしなかった？」

「兎つて、ふつうの兎じゃ当然ないよね？」

「そう、姫様風に言うならイナバ、の方よ。ていうか普通の兎なんてここにいないでしょ」

「まーそうだけどさー」などと言いながらてゐはごろごろとだらけている。

てゐ的にはまだ鈴仙をからかい足りないらしい。

鈴仙はその感じをなんとなく感じ取りながら、しかし辛抱強く答えを待った。

「…んー、でも。兎が脱走したんだとしても、あたしは知らないよ」

「なつ！？」

唐突に発せされた答えに驚く。

「えっ、だつてあんた兎たちのリーダーじゃない！そういうことまで把握してるでしょ？」

「脱走したら知らないよ、ていうか、脱走するような知恵がある兎がそもそもいないから。脱走なんてしないでしょー」

適当にあしらうような口調でてゐが言う。

「するわよ…」

しかし、鈴仙から発せられたのはその正反対に深刻な口調だった。流石のてゐも、なんとなくいやな予感を鈴仙から感じ取り、布団から起き上がった。

「いるわよ…、脱走する知恵のある兎が…」

「え、誰よ。そんな奴いたっけ？」

「ゆえ。」

「あ」

てゐが今思い出したように、ポンと手を叩く。

いたのだ、基本無知な妖怪兎の中で、例外的に頭のいい。知恵のある兎が。

「あんた絶対わかってたでしょ…」

「いや、ちょ、待った。ほんとにわかんなかったって」

そういいながらてゐは考えていた。兎が脱走、もし本当だとするなら永遠亭始まって以来の珍事件である。そもそも永遠亭は迷いの竹林に囲まれている影響で、外から訪れることも、内から出ることも難しい。そこを越えて行き来するには、魔術的に竹林を無効化（竹林の発する『迷い』を無効化）するか、竹林の地勢にほぼ詳しくなるかのどちらかしかない。あとは、若干の運も必要になる。

その辺、もといてゐの統率している兎たちの中でそんなことができるものはいない。だがもし『脱走』が事実であるとするなら、脱走したのは一人しかありえなかった。

鈴仙のお気に入り、もとい、お師匠様にさえ気に入られている。例外的に頭がよく、いたずら好きでひねくれた妖怪兎の中で、おっそろしく純粹で素直な奴。

その名を、美作みまさかゆえ。

「ゆえがいないの？」

「うん、どこ探してもいない」

「…まいったなあ」

てゐが、心底まいったと言わんばかりのため息をついた。

鈴仙のほうも、どこか元気がなくなってきた。

永遠亭の朝は早い。

憂鬱な空気を引きずっていたとしても、朝は変わらず早い。

紅い霧が来ようとも、永遠亭の朝は早かった。

もっとも、ここにいる少女たちは、それどころではなかったのだ
が。

「くしゅん！」

森の中で、盛大にくしゃみをする音がこだました。

ずず、と鼻をすすりながら。くしゃみをした張本人は森の中を歩き続けている。

頭で対になり、大きく垂れ下がった白い耳。それが彼女を妖怪鬼以外の何者でもないことを証明していた。

しかし周囲に、彼女の仲間は少しも見つけることはできない。
ひとりぼっちで森を彷徨っていた。

「うう…、ここどこなんだろう…もう、帰りたいなあ…」

妖怪鬼の少女は、不安そうにそんなことをつぶやいた。

が、すぐに首をぶんぶん横に振り。「だめだめそんなこと考え
ちゃ」と自分に言い聞かせながら、決意を新たに前を見据える。

しかし目の前の光景はそれを許してくれはしなかった。

目の前の景色にうつすら紅い霧がかかっているのが彼女にもわかった。

彼女は夜に自分の住処を抜け出てきたばかりなので、日が出る頃になってからこの紅い霧に気が付いたのだが、気づいたところで不安材料にしかなりえなかった。

今は、『元・永遠亭の兎』となっている彼女——美作ゆえは、これから一人で生きていかなばならぬと思うと不安でいっぱいであった。いっばいであったのに、さらに目の前で得体の知れぬ現象が起きている。ゆえは今にも襲いくる不安に負けて、永遠亭に戻ってしまいそうであった。

だが、ゆえは永遠亭に帰れない『理由』があった。
というかそもそも、その『理由』がなければ永遠亭から出てこようなどと思わない。

だからゆえは進み続けるしかなかったのだ。
そうしてまるで知らない道を辿り、まったく知らない森を抜け、初めて見る川を渡り、いちいちが冒険のように進むゆえに、自分が今どんなところにいるかなど気にかかる余裕はなかった。

後から考えればそれが、思わぬ幸運を引き当てたりもしたのだが。

気づけばゆえはかなりの距離を歩いており、前方に大きな山が見えてきていた。

この幻想郷で大きな山といえば、既に一つしか答えは出てこないのだが。

あいにくゆえはこの山が、どういう山なのかまったく知らなかった。

しかし、ゆえは妖怪兎の中では圧倒的に頭のいい部類に入る。彼女が永遠亭を抜け出して、まず最初に始めたのは新しい住処を探すことであった。何よりもまず、安全でいられる場所を確保しなければいけない。当然のことのようだが、ある種頭の回らない妖怪ども

では、なかなか考え付かなかつたりする。住処を持とうという考えに至らぬ妖怪すらいるのだから、然りである。

だいたい人間と同程度か、若干低いくらいの頭と考えれば、そこまで齟齬があるようでもない。

ただ彼女は永遠亭からほとんど外へ出たことがなかったため、地理的な知識があまりに乏しかった。

そのために、彼女は大きな山を見てもなんとも思わなかった。

ただ、「身を隠せる洞窟があつたりするかも知れない」と考えたのみであつた。

そうしてゆえはその高い山——通称・妖怪の山へと足を踏み入れた。

しかもよりによつて、来訪者を一番歓迎しないところへ。

ゆえが進んだ方向は、まっすぐ天狗の里へ向かつてしまう方向であつた——。

ちろちろと、小川の流れる横をゆえは歩いていく。

川の流れとは逆方向、つまり、山のほうに向けてずんずん歩いていく。

川でぴちゃん、と、魚が跳ねた。

それを見たゆえは、ぱあつと顔を輝かし、川へ近づき。水面に自分の顔を映るくらいに近づけた。

ゆえはあまり、泳いでいる魚を見たことがなかった。それは、彼女が『因幡』でないことも関係しているのだが、そのお話は、おそらく今すべきでない。

魚が再び跳ねることを期待したゆえだったが、水面に顔が映れば、魚は水面に近づく事をしなくなるのは道理である。

だが、それでもゆえは夢中で川の中を眺めていた。

それくらい、目の前で泳いでいる魚が物珍しかったのだろう。

しかし、ゆえはあまりに夢中になりすぎて気が付かなかった。

自分の背後に、先ほどこらゆえの様子をうかがう人影がいたことに。

そしてもうひとつ、この時のゆえは気づきようがないのだが。

いわゆる、天狗たちの『縄張り』に足を踏み入れてしまっていたということにも、彼女は気づいていなかった。

この狭い幻想の世界に住む。まったく関わりのない幻想の住人が二人。

どこに名が知れているわけでもない、『そのへんの妖怪』としか認識されないはずの二人。

本来、出会わずの無かった二人。

ちいさなちいさな運命の歯車が、ゆっくりと動き出した。

後に、とてつもなく大きな歯車を回すことになるなど、思いもせず。

ブログ・U（後書き）

ブログが二本立てという試みでしたが、序章の段階で長すぎたなと反省しきりです。

少し個人的な事情で忙しくなるので、更新速度は亀の如くかもしれませんが、こつこつ書いていきたいと思えます。

〈登場人物目録〉（前書き）

登場人物紹介になります。当小説では、原作に登場するキャラクターとは別にオリジナルキャラを軸にして話が進みますので、この世界のキャラクター像の足しにどうぞ。

また、原作に登場するキャラクターについても、多少設定を変えていたり、補足説明があった方が適切な変更もありますので、原作キャラについても紹介しています。原作との相違点のようなものだと思います。読んで頂けるとありがたいです。

そして二つ名に関しては、元からの二つ名に加えて、この小説内でのイメージから勝手に作った物も含まれています。

これについては、あまり気にしなくても大丈夫です。あくまで、当小説内のキャライメージを縮小したものだと思ってください。なら書くなといわれても仕方が無いですがw

ともかく興味のあるかたは、どうぞ。

く登場人妖物目録く

うさてん。く登場人妖物目録く

・狼城 ろつぎ ちやうしゅん 長春 「失われた里の天狗」「武士道の剣士」

主人公。下っ端の哨戒天狗にして、剣の達人。

恐ろしく生真面目で、典型的すぎる天狗といえる。妖怪としては珍しい働き者であり、真面目な性格と相まって、蓄財主義者でもある。

好きな食べ物は米、もしくは餅（しょうゆをつける）。辛いのは嫌いで無いが、甘いものは好きでない。基本的にはなんでも食べる。天狗の里の中では、（一名を除き）剣では誰も歯が立たないので、大天狗の周辺では、その名を多少恐れられている。しかし、本人はそんなこと知るよしもない。

剣士としての誇りを持っており、そう簡単に太刀は抜かない。これは彼の師匠からの教えを忠実に守っているからであり。歯向かわぬ者は切らない、女子供に刃を向けるなどもつての他、などの信条をにかけていて、簡単に言うとは武士道精神を頑なに守っていると言える。

元々幻想郷の天狗の里に居た訳でなく、過去に住んでいた外界の天狗の里が滅ぼされ、今はここに仕方なく身を寄せているという経緯を持つ。そのため、里全体から、なんとなく余所者扱いされている。

彼が恐ろしい剣の腕前を持つにも関わらず、下っ端の哨戒天狗のままなのは、やはり余所者であるということも一つの理由である。その上に、長春自身もそんな里の扱いにあきれており、全体的に他の天狗を信用していない。そのため、よく顔をあわせる鴉天狗などとは折り合いが非常に悪い。

また里の外にいる、多くの妖怪たちに関してもあまり関わりたくないと思っていて、独りでいることを比較的好む。

しかし、紅霧異変以来、妖怪兎のゆえと出会ってしまったことにより。少しずつそれらに変化が現れていく…。

・美作 ゆえ（みまさか ゆえ） 「看護婦になった妖怪兎」 「竹林の看護婦」

ヒロイン。永遠亭の妖怪兎にして、永遠亭の看護婦。

性格は非常に純粋で正直、人に言われたことをすぐに信じてしまう傾向にある。また、涙もろく、兎らしく臆病な一面もある。非常に表情豊か。そして、努力家な一面もあり。頭脳はなかなか優秀で、医療知識は豊富。

好きな食べ物は、お団子。甘いもの全般を好む。だがそれとは間逆に、辛いものや苦いものにも予想以上の耐性がある。なぜかすっぱいものが苦手（主にうめぼし）。

永遠亭に住み着く妖怪兎の中では（てゐに次いで）もっとも頭がよいとされている。月の兎である鈴仙からも信用されており、よく仕事を手伝ったりしている。月の賢者・八意永琳からも一定の信用を得ていて、その知識と技術を評価されている。意外にも、てゐとの仲もそこそこ良好。

彼女はそれらの評価が非常にうれしく、いつか永琳や皆から「一人前の看護婦」であることを認められることが夢であるらしい。

しかし、ある事をきっかけに。ゆえが決定的に医療者として向いてないある事実が発覚し、永琳から見放されたような言葉を言い渡される。それにショックを受けたゆえは、永遠亭を脱走してしまう…。

・犬走 桜 いぬばしり もみじ

「白狼の下っ端哨戒天狗」 「哨戒天狗の侍大将」

下つ端哨戒天狗だが、一応小隊長的立場の天狗。形の上では、長春たちの直属の上司。

非常に真面目で、仕事は出来る方。優しく、面倒見が良いので、まともに仕事をしない面子に困らされることもしばしば。本気で怒るとけっこう怖い。

「千里を見通す程度の能力」を持ち、それを生かして哨戒天狗の任務を果たしている。ただ、能力の使用には一定の精神集中が必要で、いつでもできるかというところでもないらしい。

武器は大剣と紅葉の紋が入った盾で、里の中ではなかなかの使い手に分類される。

頭が切れるわけではないが、気は利く。鴉天狗や里の支配層とは、形式上の付き合いがあるので、顔が利くようである。ただし、だからと言って好感をもっているかというところではないらしい。

長春と仲がよく、彼の抱える過去を知る数少ない内の一人でもある。そのためか、何かと長春を気にかける。しかし、時にその気遣いが暴走することもある…。

・葉走 せいはしり 西北 せいほく 「怠け者の下つ端哨戒天狗」「天狗の里の天才棋士」

下つ端哨戒天狗で、長春の同僚。

長春も長身だが、彼も同じくらい長身。大柄で、力も強い。ただし性格は二つ名の通り、かなりのサボリ魔である。

多少なまったような、だるいような話し方が特徴で、常にやる気があるように見えない。しかし、長春と同じ師匠に剣を教わっており、一定の実力はある、らしい。

髪が奇抜な色なのだが、それは彼が幕末以後の異人天狗として生まれたからだと言う。ある意味特殊な経歴持ちの天狗。そのためか、一般的に真面目な天狗のイメージとはすっかりかけ離れた性格の持ち主。

将棋やその他盤上遊戯にかなり強い。理由は不明。
椿をいつもからかっており、仕事も真面目にこなすことはほとんどないが、状況を見極める目はある。

また、飄々としてぼうつとしているような平生とは違い、暗い過去を抱えていたりもする。それが元で、長春とゆえについて、あまりいい風には見ていないようだが…？

・北平 椿 きたひら ちづめ 「見習い哨戒天狗」

下っ端哨戒天狗の見習い、下っ端の下っ端にあたる天狗。

まだ幼さの残る少女の姿で、天狗の中でも圧倒的に若い部類に入る。

常に元気、快活で普通にしゃべるのにも大声。上下関係とかそういうのがよくわかっていないところもあり、ある意味社会勉強不足などともちよこちよこある。

剣技やその他諸々あらゆることがまだ修行中で、一人前には程遠いか、ひたむきで前向きにがんばっている。

単純で純粹なところからなのか、ゆえとは色々と波長が合うようである。椿大好きっ子。西北にはいつもからかわれているので、いつか見返してやるのが目標らしい。

時として、そのあまりに純粹な目線がさまざまに影響を与えることもあるようである…。

・秋海棠 侘助 しゅうかいどう わびすけ 「底知れぬ哨戒天狗」「無の欲知」

下っ端哨戒天狗で、長春の同僚。のはずなのだが、なぜか上位の鴉天狗をつかいつぱにしたりすることがあつたりと。よくわからない存在。

なぜか、他の誰も知りえないことを知っていたりする。だがそれをひけらかすようなことはせず、重要なときに滔々と話し出すこと

がある程度。裏で暗躍していることが多い謎の天狗。

とはいえ、何か暗いイメージがあるのかというところという訳でもなく。長春たちとは普通に仲がよく、特に問題を起こすことも滅多に無い。また勤務態度も真面目で、文句のつけようがむしろ無い。また、性格もむしろ誠実で、よく出来た性格をしている。

いつもはにこにこして感じていいのだが、どうも鴉天狗らと話すときは違う表情らしい。彼と話した後、泣きながらどこかへ飛んでいく鴉天狗が多数目撃されている（らしい）。

妖怪の山のある場所に毎年生えている、大きな瓔珞草ようらくそうの花をひどく気にしているようで、よく眺めているようだ。理由は確かでない。

・伏見 紫蘭ふしみ しづらん 「笑い上戸の剣聖」「成金天狗」

天狗の里を取り仕切る大天狗の側近にして、里の実力者が集う『寄り合い』と呼ばれる集まりのメンバー。その上に、長春らの剣の師匠でもある。

比較的酒飲みといわれる天狗の中でさえ「上戸」と呼ばれるほど酒飲みであり。常に飲んでるといっても過言で無い。そしていつも笑っている。笑いながら物を言うので、真面目に言っているのかわからないのかの判断がつきにくいのが難点。

だが剣の腕前は非常に優秀で。刀を『抜かせたら』右に出るものはいないと言われている。その腕は長春も一目置くほど。

里の中でもかなり名前が知れており。かつて哨戒天狗であった時、突然大天狗から側近にとりたてられたので、今の天狗がその名を恐れて取り込んだのだともっぱらの評判となっている。

実は長春と似たような過去の持ち主であり、元いた里を追われてこの里にいる。長春とは、その過程で出会い。この里に来る前から師弟関係を結んでいる。

しかし、里の『寄り合い』に彼女が参加するようになってから。

・八意 永琳 「月の頭脳」「蓬萊の薬屋さん」

月人にして、永遠亭を実質取り仕切る薬師。ゆえや鈴仙の師匠。ゆえについては、鈴仙の次に信頼を置いているようで、脱走に關しても多少の関心を見せる。

だが、脱走のきっかけは自分の言葉であると自覚していたため。何か行動を起こすことはせず、経過を見守っている。

鈴仙だけでも永遠亭の仕事は務まるので、あまり気にかけていないふうを装っているが…？

・射命丸 文 「伝統の幻想ブン屋」「小うるさい風神カラス」
鴉天狗にして、「文々。新聞」の記者。天狗の中での身分は高い方。

なかなか新聞のネタが見つからない中、普段と視点を変えてみようと、普段は気にかけることも無い哨戒天狗の日常を探ろうとして長春らと接触しようとする。

侘助と顔見知りで、彼からは「射命丸先輩」と呼ばれている。
長春らからの評判は（新聞、人物含め）、全般的に良くない。

・姫海棠 はたて（ひめかいどう はたて） 「今どきの念者記者」「ひきこもり新聞記者」

鴉天狗にして、「果化子念報」の記者。天狗の中での身分はまあまあ高い方。

引きこもりから脱却して、文と取材合戦する際、顔見知りの侘助に接触する。以後、取材と銘打ってちょこちょこ遊びにきたりする。侘助からは「はたて先輩」と呼ばれている。

長春らからの評判は（新聞、人物含め）、悪くは無い。

・稗田 阿求 ひえだの あきゆう 「幻想郷の記憶」 「幻想郷の生き字引」

稗田家の九代目当主。見たものを全て記憶する程度の能力を持つ生き字引。

永遠亭の置き薬を利用して、その確認に鈴仙がやってくる。それに付いてくるゆえをたびたび見かけているため、一応ゆえとは顔見知りらしい。

ふとしたことからゆえと長春の関係を知り、その頃から何かをしただため始めたらしいが…？

・河城 にとり（かわしろにとり） 「超妖怪弾頭」 「河原の天才技術師」

河童にして、かなり腕のいいエンジニア。

機械いじりに関しては右に出るものがないと言うのが自慢らしいが、たびたび失敗する。暴発した装置に飛ばされて、長春たちの哨戒区域まで飛んでくることもしばしば。

住んでいるところが天狗の里の近所であり、天狗の里に出入りが許されている数少ない種族のうちの一つである。そのため、たびたび『奥』に発明品の売り込みをかけているようだが、成果は不明。

桜や哨戒天狗の皆とはしょっちゅう将棋を打つ仲、長春が同族以外で心を許す数少ない存在の一人でもある。

ちなみに、永遠亭と何か取引があるようで、ゆえのこともいくらか知っていたらしい。

・上白沢 慧音 かみしらさわ けいね 「人間が大好きな半人半獣」

半人半獣のワークハクタク。人里で寺小屋の教師をしている。

永遠亭の置き薬を利用して、その確認に来る鈴仙・ゆえとは顔見知り。

それ以前に長春とは過去にある事件があり、一応並以上の付き合いがある。独り孤独な長春を、人里に招こうといろいろ画策したりするおせっかいなところがあり、長春としてはそれが煙たいらしい。

・ナズーリン 「タウザーの小さな賢将」「ネズミたちの猿山大将」

毘沙門天の弟子・寅丸星の部下にして、タウザー。種族はネズミ。宝塔探しの途中、妖怪の森を通り抜けようとして長春らと戦闘することになる。

その後、そんな天狗たちがいたと主人に話したところ、主人の星がその話をいたく気に入ったらしく。なぜかたびたび長春らのもとへ使いに行かされる様になった。

長春とはなぜか犬猿の仲で、会うといつも悪態を付き合う。

・魂魄こんぱく 妖夢ようむ 「幽人の庭師」「半人前」

半人半妖で、白玉楼の庭師。半人前。

春雪事変の際、ひよんなことから長春と斬り合う事になる。

それ以後、長春の剣の腕前に敬服して。度々手合わせを申し出て来て、そのたび打ちのめされている。剣の腕前も半人前。

いつも物騒な刀をしょっているため、ゆえからは恐れられている。そのため、基本長春も歓迎はしてない。気の利きようも半人前。

しかし長春やその周囲からは「半人前」とは呼ばれないので、彼女としては長春たちが非常に好意的に見えるらしい。空気の読み方も半人前。

紅霧の巻・其の一（前書き）

この小説に関する諸注意 この小説は、東方projectシリーズ（以下、原作）の舞台。幻想郷の世界を参考にして、オリジナルキャラを多数登場させている。世界観を借りただけの悪くいえば捏造小説です。主に天狗や河童、永遠亭に関して、原作では触れられていない設定などが追加されていたり、作者の独断により一部設定を変更している箇所もあります。また、本来原作に登場しない、幻想郷の『一般』の存在にスポットをあてるために、一部を除き、原作での登場キャラの出番が極端に少ないです。その点をご了承の上。拙作をお楽しみいただければ幸いです。

紅霧の巻・其の一

うさてん。紅霧の巻・其の一　（兎天騷動）

長春は自分の目を疑った。

自分の勘を信じて来てみたのはいいが、そこにいたのは彼のまったく予想していなかった人影であつたからだ。

彼が遠目にとらえたのは、小柄な少女であつた。

短くくせのある黒髪、そこから生えて垂れ下がる大きな白い耳、はだして平然と歩いている上に、桃色で作りの簡単そうな服を着ている。その服にも、耳にも、長春は見覚えがあつた。

「……あれは、妖怪兎か？」

森の影から少女を観察する長春は、最終的にそういう結論に至つた。

至ると同時に、やっかいなことに気づく。

曰く、竹林の奴らか、と。

長春の頭の中に『永遠亭』の文字が浮かんた。迷いの竹林の奥にあり、多数の妖怪兎と、何か得体の知れないものが住んでいる、との噂がある場所であつた。で、やっかいなのはその『何か得体の知れないもの』の方である。

保守的で排他的な天狗社会も、情報だけではどこぞの鴉天狗らのおかげで風の如く速い。竹林にへんちくりんな奴らが住み着いているらしいという情報も、幻想郷一の速さで届いた（もつとも、随分昔から住んでいて、迷いの竹林の中にあるから今まで明らかになつていなかっただけでもある）。それでどうも住み着いた奴らは妖怪兎と手を組んでおり、なおかつ相当性質が悪いと取り沙汰されていた。これを受けて、天狗の里を仕切る大天狗は、長春ら哨戒天狗に対し

「妖怪兎に手を出して、永遠亭と厄介を起こすな」と命令されていたのだった。

つまりは「里に妖怪兎が近づいても、相手を攻撃したりせず。うまく追い返せ」という無茶な命令を出されていた。

しかし、そんな命令を出されていても、今まで特に問題はなかった。

なぜなら今まで一度も妖怪兎が里に近づいたことは無かったからだ。

が、今長春の目の前に広がる現実、容赦なくその問題と向き合わせている。

「そもそも妖怪兎つてのは、竹林から滅多に出ないって聞いてたんだが…」

長春は慎重にその妖怪兎との距離を詰めながら、つぶやいた。

何も知らない桃色の塊は、少しずつ、しかし確実に天狗の里の方向へと向かっていった。それが歩いているところも既に天狗の縄張りであり、普段ならとくに警告攻撃を加えるところである。

このまま進ませることは論外である。しかし、進ませまいと立ちふさがれば、戦闘になるかもしれない。その時、こちらから攻撃を仕掛けることなく体よく追い返せるか、と聞かれれば。

「そんな事できる訳ないだろ」

長春はひとまず、自分の中にある非現実的な案を蹴った。なんとかする手立ては無いかと再考する。

しかし再考している間にも、問題のそれはずんずん里の方向へ向かっていくので、熟考する時間も無かった。

あい仕方なし。長春は意を決して木陰から出た。

とにかく里の方向へ進ませるのはまずいので、長春は妖怪兎の前に出る。

こちらから攻撃を仕掛けなければいいんだろ、なら立ちふさがって警告するまでならギリギリOKなはずだ。と長春は考え、妖怪兎の進路へ仁王立ちになりきつと睨み付けた。

「おい、」

そして警告の語句を発しようとして、長春は自分の目を疑った。彼が睨みつけた先には、さっきまでいたはずの妖怪兎がいなくなっていた。

それに気づいた彼はすばやく辺りを見回し、身構えた。もしかしたら感づかれていて、先制攻撃を加えるつもりでこちらが出てくるのを待っていたのかもしれない。不用意に出るのは失敗だったかと。

右手を刀の柄に添え、いつでもこい。という体制を整えたちょうどその時。

見失っていた桃色の影は、あっさりと見つかった。

長春は、二度も疑った目を三度疑うことになった。何を隠そう、探していた妖怪兎は、いつの間にか道の側を流れる川に、四つんばいになって顔を突っ込んでいるではないか。しかも、こちらに背を向けながら頭だけ突っ込んでいるものだから、めくれあがったスカートの下が見えそうであった。いや、かすかに見える。ドロワだ、たぶん白。

「……………何してんだ、お前」

とりあえず長春は、この理解不能な光景に対処するため。当事者を尋問してみることにした。

しかし、その声が聞こえないのか。その影はいつまでも川から顔を上げなかった。

何してるんだか、ともかくずかずかと妖怪兎の側まで歩いていく。すぐ隣に仁王立ちになり、そこで初めて、妖怪兎が川に顔を突っ込んではおらず、あくまで水面に顔を近づけているだけだとわかった。それくらい顔を水面に近づけていた。魚でも獲るつもりなのだろうか。

「おい！そこのお前！」

もついい加減いらいらしてきた長春は、とうとう語気を荒げた。そこでようやく、その大きな白い耳に声が届いたらしい。「むが

っ!？」とか言いながら、桃色の塊は慌てて顔を上げ、——すぐ横に立つ長春を見上げ、その赤くて大きな目を見開いた。

その瞳は、まるでルビー、紅玉のように透き通っていた。そのまま宝石をはめ込んだかのような美しい目、それが長春が手を伸ばせばすぐ触れられそうな距離で、大きく大きく見開かれていた。

それを見た彼は、一瞬目を逸らした。

大きな赤い瞳。それも、透き通るように美しい。

彼には一人、同じ瞳を持つ者を知っていた。

それを思い出して、思わずその瞳を視界から外したのだった。

それがこのとんでもない偶然の引き金になるとも知らず。

一瞬目を逸らした彼が聞いたのは、タツ、という、ごくごく微細ながらもわずかに聞き取れる、足音であった。

長年哨戒天狗をしている彼は、少なくとも人型をした生き物がそんな静かな足音を立てられるはずがないと知っていた。そんな音が出せるのは、獣か、もしくは例外的に——。

彼は一瞬逸らした目を一瞬で返した、そして、今にも走り出さんとする桃色の塊を目の端で捉え、やみくもに手を伸ばし、捕まえようとする。決して反応が悪かったわけではないのだが、伸ばした手は虚空を掴んだ。桃色の衣服をかするようにして伸びた手をすばやく引つ込め、刀の柄に手をかけた。が、次の瞬間にはもう射程外にその塊は移動している、やむなくそれもあきらめ、ともかく足を動かし追いかける。

「待て!待ちやがれ!」

無駄とは知りながらも、やはり追いかける側になるとつい叫んでしまう言葉を言いながら、彼は必死に妖怪兎を追った。

めんどくさいことになった、と思いながら。

あるうことか、妖怪兎の逃げていった方向は。見事に天狗の里へ直行する方向であったのだ——。

「はあっ、はあっ……やっど、振り切った……？」

深い森、一面の深緑に彩られた風景の中で。まるで迷子のような桃色がそうつづやいた。

大きな白い対になった耳、どこでもお構いなしの裸足、そして桃色の簡素な衣装。

永遠亭から脱走し、天狗の縄張りに迷い込んだ妖怪兎・美作ゆえ、その人である。

その彼女は、今自慢の耳をそばだてて（とはいえ、そこまで聴力が優秀な訳ではない）、深い森の中を探っていた。

彼女の荒い息遣い以外には、生き物の気配を感じることはなかった。

そのことを確認した彼女は、ほうっ、と息をつき。すぐ側の朽ちた大木に腰掛ける。まだ肩で息をしている、どうやら相当走ったようだ。

「あぶなかった……」

ここまでの恐怖を思い出し、彼女は息とは別に肩を小刻みに震わせた。

川で魚を見ていたら、横から突然声をかけられ、ぱつと見ると、ものものしい刀を下げて、今にも斬りかかりそうな目をしていた大柄の男が立っていたのだ。——少なくとも、彼女はそう思ったようだ——まさに脱兎のごとく逃げるのも仕方がなかった。

しかし、あそこまで必死に逃げたのには別の訳もあった。

息を整えた後も、彼女の肩の震えは治まらなかった。むしろ小刻みな震えは激しさを増し、制御が利かないようにすら見えた。

まるでまだ恐怖の根源が、自分の中に残っているかのような。一種のトラウマに囚われているような、そんな感じである。

それを癒すには、この深緑の真ん中はあまりに孤独であった。

震える彼女が思い出すのは、かつて居た場所。

それに首を振らねばならないのも、今の彼女にはつらかった。

突然だが、天狗は目がいい。

少なくとも山の隅々まで見渡し、侵入者を探知できる程度には、である。

しかしまあ、哨戒天狗に限った話だと宝の持ち腐れであつたりする。

もともと妖怪とは視覚の感覚を主に活動しているのでないため、もっぱら気配やらなにやらを感じる第六感とでも言うべきものを信用する傾向にある。つまり、何か気配を感じた時に、その相手を確認するため初めてこの立派な視覚を使う、とそんな感じである。視覚を使って探索とかはしないのである。

だが、そんな目を持つからには、それを有効活用せねば損だ。と彼は思うのであつた。

長春は、森全体を見渡せる木の上に居た。

そこから、例のアレが逃げた方向を見る。まわりが緑だらけの中で、ちらりとでも桃色が見えればこちらのものである。紅霧で多少景色がかすれていたが、天狗の目には特に支障はない。

そして、案外あっさりとそれらしき影を見出した。

「…見つけた」

そうつぶやくなり、長春は木から飛び降りた。軽やかに着地し、その地点へ一目散に駆ける。

だが、どうもその姿は侵入者を追いかける者の姿では無いように見えた。

姿かたちは確かに哨戒天狗。侵入者を退治しようとするそれには見えない。

しかし、目が、目があまりに優しい目をしていて。

それに気づく者がどれほどいるかを別にして、あまりに穏やかで、落ち着いていて、むしろ哀愁に満ちてすらいた。

何かを排除しようと考えているというよりは、なんとかしようと心を痛めているような——そんな、感じを持たせる目であった。もっとも、それに彼女が気づくのは相当後の話になるのだが。

森の中で一人ぼっちのゆえは、やはり一人でこの後どうしようか考えていた。

山へ向かったしよっぱなからこの有様であったので、もう完全に妖怪の山へ行く気は失せていた。

しかしだからと言って、何か行く当てがあるわけではない。さらにもう一つ大きな懸案事項があった。

「ここ、どこ？」

彼女はさっきまで座っていた朽木の上に立って、背伸びをしつつ出来るだけ遠くを見ようとした。が、元から深い森である上に、ゆえの身長はかなり低い方で、とてもそんなことで遠くを見渡せるはずなどなかった。

頭一つ飛び出たような木に登れば、あたりを見渡せるかもしれないが、ゆえは木に登れなかった。空を飛ぶことも出来ないわけでないが、今飛ぶとかなり目立つ。またあの物騒な奴に追いかける、と彼女は危惧した。

「ううん…どうしよう」

そうして彼女は思案に暮れることとあいなつたのだが、都合よく名案など出るはずもなく。

「仕方がないわ、『どこへ行くのかわからないのなら、どの道を行っても同じだ』ってお師匠様も言ってたし、とにかく行こうつと」そこで不意に『お師匠様』という言葉を出してしまい、ゆえは自分の言葉ではたと動きを止めた。

うああああ、と呻きながら、自分の頭をぽかぽかと叩く。

「ダメじゃない、お師匠様のことを考えちゃ…」

自分で自分を責めつつ、今にも泣き出しそうな顔をする。

しかしそんな彼女は、次の瞬間に飛び上がった。

すぐ側の木陰から物音がしたからである。

その物音の方へ顔を向けた彼女は、再び恐怖にすくむことになった。

さっきまでゆえを追いかけていた影が、深緑の奥から姿を現したのだ。

あわてて後ずさり、ゆえは長春の来た方向と逆の方から逃げようとする。

そこへ冷静な声が響いた。

「やめとけ」

ゆえはそれを見し、駆け出そうとする。しかし、

「やめとけと言ってる」

いつの間にか腕をつかまれ、制止させられていた。一瞬で間合いを詰められたのだ。

見ると、長春の方は右手をなぜか懐に入れ。左手でゆえの手を掴んでいた。

刀の柄に手がかかっていないのが、ゆえにとっての唯一の救いであつた。

「っ！離して！」

動きを止められ、ここ一連の恐怖の元凶が、いまどういうわけか自分を捕らえているので。ゆえを襲った恐怖とは計り知れないものであり、青ざめた彼女は力いっぱい腕を振り払った。

すると意外にもあつさりと腕はほどけた。しかしあまりに力いっぱい腕を振ったために、体勢を崩して転んでしまった。

ゆえが立ち上がるまでの間に、長春は口を開いた。

「お前の背後はもう森が深すぎて、お前でも走ることばできん。もうこれ以上逃げるのはよせ」

長春としては、優しく（本人談）諭したつもりだったのだが、ゆえには警告というか、絶望に近い事実を突きつけられたと感じ。恐

怖と同時に怒りまで想起させることになった。

長春としては、この直後に「とりあえず話し合おう」とでも付け加えるべきだったのだが、それをすっかり忘れた。そのために、立ち上がったゆえは毅然とした瞳で長春を見据え、そして肩にかけていたバツクのようなものから、何かを取り出した。

それは五寸（約15cm）以上はあるかという、針、だった。少なくとも医療用や裁縫用ではないことは確かであった。両手指の間に三本づつ挟み、長春に向かって構える。

天狗の中でも、長春は高身長だ。それに針を構えたゆえが向かい合うと、大の大人に子供が挑んでいるようにも見える。

しかし何よりも、彼女の瞳が、既に話し合いの余地がないことを告げていた。

彼女の覚悟もまた、それで明らかであった。

「おい待て、まずは冷静に……」

長春はひとまず説得しようとしたが、すぐに不可能だと悟り、口をつぐんだ。

いらついたように高下駄を踏み鳴らし、はあ、とため息をつく。どうせこうなるとは思ってたけどな、と思いながら。長春はさつきからずっと懐に入れていた右手を取り出した。

姿を現したその右手には、刀が、腰に下げている太刀よりはるかに小さいものだが、少なくとも刃渡り六寸はくだらないだろうという刃物を握っていた。いわゆる二の太刀、脇差、のようなものである。懐刀と言えは多少の語弊はあるが、その手のものだ。

長春は、太刀は抜かなかった。

それは彼なりに事情があつてのことなのだが、ひとまずこの場で氣にするものは居なかった。

針を構えて動かないゆえは、長春の懐から出てきたそれを見て、その紅い瞳を見開いた。

まるで、長春をはじめて見上げた時のように。だがその見開いた瞳は、その時のようではなかった。あの時は限

りなく大きく開いていた美しい紅に、一筋の影が差し込み、それが広がっているような、くすんだ紅玉のような、そんな気配を感じ取ることが出来た。

長春はゆっくりと右手をゆえの方へ向けながら、それを感じ取っていたが、特に気にしなかった。

剣の切っ先と相手の目線とを合わせる。剣法の基礎だ。

だがそれを実行し、さあこい、と身構えたとき。その異変はとうとう無視できぬ程になっていた。

「……ひっ……ぐっ……」

ふと耳に入っただのは、幼子がぐずったときに出すような。かすれた泣き声。

ん？と長春も気を取られたが。武器を持った相手と対峙している手前、声の主を探す間もなかった。

だが、ふとおかしいと感じる。

今この場には、自分とこの向かい合う妖怪兎しか居ないはずである。

「ぐずっ……ひっく……」

聞けば、声は前の方からする。

「うっ、うっ……ひ、ひっく……」

切っ先の向こう、相手の目が、紅玉のような目があるはずのその先を見て、長春はあ然とした。

「う、うっ……ひっ……ふええ……」

確かに二つ紅い瞳がある中で、しかしその瞳はひどくうるんでいて、鈍い色を出していた。

いや、うるんでいるではすまなかった。見れば大粒の涙が両方の目からあふれにあふれ、ぱたぱたと輪郭をつたって水滴が落ち放題ではないか。

「なっ……？」

どうした？と反射的に聞きそうになり、構えを解いて、思わず一歩踏み込んで相手に歩み寄ってしまった。

これは長春の取れた行動の中でもっとも穏健なものであったが、この時は最悪の選択であった。

涙に濡れた妖怪兎は、まるで臆病な兎の地が出たかのように、距離をつめた長春に飛び上がり、叫んだ。

「いやああああああ！ああああああああああ！！」

構えていた針を投げ出し、逃げようとするが、足をもつれさせて盛大に転んだ。

だが、まるで這って逃げようとしてもするかのように。必死に地を這いつくばっていた。

実際には、この時ゆえは足腰が立たなかったのだが。それを知らない長春は、いろいろと理解不能ながらも、ひとまず落ち着かせようとして、地に転がりながら泣き叫ぶのをやめない兎に駆け寄った。

この時右手の刀をしまわなかったのが、長春最大の失敗であった。

「おい！どうした！？落ち着け！おい！」

匍匐前進をがむしゃらに行おうとしながら、うまく進めておらず、結果的にもがいているようにしか見えない兎の肩をひつつかみ、長春は自分の方を向かせた。

ゆえはおびえきった目でその姿を見、ついで右手のそれを見て、再び目を見開いた。

必死に逃げようとするが、長春が落ち着かせようとゆえの肩を掴んで離さなかったので、それがかなわない。

ゆえにはもう刀しか見えていなかったのだが、そんなこと誰も知る由はない。

逃げられないと悟ると、とうとうゆえは目に見えて青ざめ、目から涙を大洪水させ、動くのをあきらめて。

代わりに、泣いた。叫んだ。

「うっ、うあああああああああああああああああああああ

あああああああああああああ
んん！」

耳をつんざく様な驚異的な声量の叫びに、流石の長春も飛び上がり、ゆえの肩を離した。

だがゆえは、こんどはじたばたすることはしなかったが、代わりにその分のエネルギーまで泣き叫ぶことに使っているようだ。地べたにへたりこみながら、大音量で泣いていた。

これじゃまるで赤ん坊か！と長春は思った。いや、ひょっとしたらそう言ったのかもしれないが、この叫びの中では聞こえるはずもない。

「おい！落ち着け！俺を見ろ！というかまず泣くのをやめろお！」
 なんとかゆえの耳へ届くよう、長春も声を張り上げる。が、あち
 らに聞こえた様子も無く。

必死に注意を引こうとするも、泣き叫んでばかりでどうにも氣に
かける様子も無い。

そんな問答、続ければ続けるほどいらするのは目に見えており。長春もとうとう、

「泣くなって言うてんだろこの野郎お!!」
と怒鳴り散らすようになっていたが。 いかんせんそれも効果が無い。

どう怒鳴り散らそうが、脅迫しようが、なだめようが、まったくもって効果が無いので。とうとう長春もお手上げとなり。しまいは。

「くっ……だ、誰かぁ！助けてくれえええええええええ！」
と、手前の妖怪鬼とさっぱり変わらないような叫びを上げることになった。

というよりも、ひとまずこの場で長春が右手の刀を納めれば、少しは状況が改善したのだろうが。この場で指摘するものはおらずじまいで。

妖怪兎のほうは、ちょっと泣き止んだかと思ったら、またその刀を見て泣く。それにいらいらした天狗が叫ぶ。それに気づいてふと兎がちらと見る、また刀を見て泣く……。

とそれを永遠に繰り返す有様で、まったく何も事態は進まなかった。

妖怪の山の深い森の中。

二人の妖怪の叫ぶ声がこだまし続けていた。

その二つの声は、まったく違う声であったが。二つとも、助けを求めていることは変わらなかった。

それが美作ゆえと狼城長春。泣き、叫んではかりの初対面での事――。

本来出会うはずの無い二人が、出会ってしまったその時の事である。

紅霧の巻・其の二（前書き）

ぐだぐだした展開ですが、少しづつお話はすすみます。

紅霧の巻・其の二

うさてん。 紅霧の巻・其の二 〱 兎天騒動〱

外の様子に反して、その日の天狗の里は平和であった。

朝方、突如周囲を染める紅い霧が取り巻いたときは、多少の動揺はあったようだが。霧の発生源が里に関係の無いところだと分かるや否や、『奥』の連中はあっさりと平常運営に戻ったようである。

結果的に、哨戒天狗の彼らも、平常運営となっていた。

「西北！将棋やろうよ！将棋！」

滝の裏にある洞窟の中に、元気な声が響いた。まだ幼さの残る少女の声が、洞窟内でガンガン反響している。

「んだお前、またやんのかよ？何度やっても俺には勝てねーぞ。

それと洞窟で大声出すなっつったろ、耳いてえわ」

けだるそうな声がそれを打ち消すように低く響く。それに続いて、何かを小突く音が聞こえる。おそらく椿の頭をひっぱいたのだらう。

「いたーっ！！」

「だー！だから大声出すんじゃないねえ！鼓膜破れるわあ！！」

そう言っただけで西北はまた椿の頭をひっぱいた。結局、洞窟内には高めの声と低めの声がガンガン響くこととなり。少なくとも音響に閉じてのみ、事態の改善する見込みは見えなかった。

だが当の二人は、お互い将棋をやることに邁進しながらぎやーぎやーわめいており、非常に楽しそうな様子であった。

「……何だかんだ言っただけで、仲良いだよねこの二人」

洞窟の側壁によりかかって座り込みながら、そんな二人を見守る椿がつぶやいた。

そこへ、涼しい顔した侘助がやってきた。

「栞さん、何かおかしいと思わない？」

「え？何が？」

侘助も栞の隣に腰かける。

「長春だよ、あんまりに遅いと思わない？」

そう言われて、栞はぎくつ、とした。

気にしていることをすっぱり言われ、栞に多少の動揺が走る。

「…うん、確かに。ちよつと気になるね」

「でしょう？どうしたんだろうね」

侘助は、あんまり気にしていない風に言った。だが、侘助は侘助で、そんな栞の反応をおもしろがって見ていたりした。

侘助という天狗は、したたかな奴なのだ。

栞は突然立ち上がり、仁王立ちになって、目を閉じた。

はたから見れば、立ったままで瞑想しているかのような様子だが、これは彼女の能力を使っているのだ。

「……え？」

が、その彼女が発した第一声は。なぜか疑問系のつぶやきであった。

「どうしたの？」

侘助は大して心配してなさそうな口調で栞に問いかけた。

栞は、立ったままの姿勢で、しかし目は見開いて。困惑した顔でつつ立っている。

「いや…今、長春を探して、それで見つけたんだけど…」

「見つけたけど、どうしたの？」

「なんか変」

真顔で栞が言った。

危うく侘助は、そのシユールな光景に吹き出すところであった。

「なんかつて？」

「わかんない。とりあえず、長春ともう一人、見たこと無いのが居て…長春は（刀を）抜いてるんだけど、もう一人のほうはへたれこみながら泣きじゃくってて…うーん？」

説明しながら椀は頭を抱えてしまった。多少ひどいことを言うようだが、椀はあまり説明するのは得意で無い。

とにかく椀から得た情報より、侘助が適当な推量をする。

「んー、長春が抜いてるんなら。そいつは侵入者じゃないかな？ やり合ってる最中だったりして」

あくまで、適当である。

「そんなふうでもなかったんだけど…」

的を得た表現を見つけることができない椀が、否定的な反応をする。

少しの間、侘助が適当な推測を適当に言い。それを椀がこれまた案外適当に聞き流すということを繰り返す。

そのうち、椀は意を決したように、側壁に立てかけていた大剣を手に取り、背に回して装備した。

「やっぱりちよつと行つて来る！」

こらえ切れなかったように、椀はそう宣言して。洞窟の外へ駆け出した。

「はいはい、いつてらっしゃい」

侘助は至極満足そうにその背中を送り出した。

もとより、侘助はこれを狙っていたのであった。実を言うと侘助は、長春が今どうしているか。本当はわかっていたのである。

「早く行つてあげなよ、椀さん。そうじゃないと、今の長春にはどうしようもないだろうからね」

クスクスと薄い微笑をもらしながら、侘助はつぶやいた。

「ん？ありやあ？おい侘助、椀の奴どこいったんだよ」

「さあ？長春の様子でも見に行つたんじゃない？」

「ふーん、そうか」

西北が将棋をしながら、特に気にして無いような感じで質問をしてきて、これまたその答えにも関心がないような返事をした。

椿に関しては、この問答に加わる余裕が無いほどに将棋に熱中しているようだ。

彼らにとつては、何事も無い。いつもの哨戒天狗としての日々。暇をつぶすだけの日々。

その日常の齒車が、少しずつ。本当に少しずつだったのだが、ズレはじめているということに。この場に居る誰もが。侘助でさえ、気づいてはいなかった。

この時は、そのズレを引き起こす張本人たちですら。そんなこと考え付きもしなかった。

(……こつちだ！)

妖怪の山上空、深い森の上を高速で飛ぶ椛は、見覚えのある木を目印に、目的の場所へ向かった。

多少木が薄いところを狙って、地上に降り立つ。

目的地は木が茂りすぎて、直接着地することが難しかった。そのため近くで降り立ち、そこからは走って移動する。

全速で駆けると、椛自慢の耳がなにか音を捉えた。なにかが叫ぶような声を聞き取り、椛は足を速める。

そしてとうとう、茂み一つ先に。ちょうど木陰から飛び出たように見える長春の頭を確認した。

椛は背の刀に手をかけ、素早く茂みに伏せた。

味方を見つけたからといって、すぐに飛び込むのは素人のやることである。まずは様子を確認し、その状況に応じて適切な行動をとれるよう判断せねばならない。

万が一にも、長春が侵入者に遅れを取るはずは無いと椛は信じていたが。やはりこれは外せなかった。

無闇に飛び込んで、助けに来た方も助けられたほうも混乱してしまつては意味が無い。

だが、今回は無闇に飛び込もうが考えて飛び込もうが、混乱しかなかったとも言えた。

「うああああああああああああああああんん！！」

茂みの向こうへと耳をすませた椛が聞いたのは、耳をつんざくような、子供の泣き声であった。

（えっ？何が起きてるの？）

しょっぱなから混乱した椛は、ひとまず茂みの影から、ちらと様子伺う。

見れば、大音量で泣いているのは、桃色の服を着込み、頭に大きな耳のある、妖怪らしき少女であった。そしてその向かいに、抜刀した状態で突っ立っている長春がいた。よく聞くとこちらでも何か叫んでいる。

「だーもう！いい加減にしろこの野郎！泣き止めコラア！！」
こちらはこちらで、必死の思いで叫んでいるのがひしひしと伝わってきた。しかし向こうに伝わる様子は皆無であるようで。

相変わらず、妖怪少女は大音量で泣いていた。

というか、何やってるんだろ？長春は。警告を聞かない侵入者なんていくらでもいるんだから、切り捨てるなり、さっさと首根っこひつつかんで放り出せばいいのに。

そこまで思ったところで、ん？と椛は気づいた。

よく見ると、桃色に身を包んだその少女は…。

「……妖怪兔…？」

ようやく椛は状況を理解した。そしてこんな状態になった原因もうつすら把握した。

それと同時に、やっぱり長春なにやってんのかと思ひ直した。

ああ、でもそうかあ。と椛は笑いたい気分だった。

長春は生真面目すぎるのである。そのせいで多少柔軟性に欠ける。一つこれ、と決めたらなかなか方向転換が出来ないのである。仕方が無いな。と椛は立ち上がった。

当然、刀の柄から手を離して。

「長春ー……？」

比較のおだやかな口調で、椛は長春に声をかけた。

妖怪兎と一緒になつてぎゃーぎゃー叫んでいた長春も、椀の気配に気づき。その姿を認めた。

認めたと同時に、椀へ助けを求めた。

「も、椀！いいとこに来てくれた！こいつ、こいつをなんとかしてくれ！お前ガキあやすの得意だろ！？」

さっきまで叫んでいた延長なのか、けっこうな大声で長春は懇願した。その姿がなんだかあまりに子供っぽいので、椀はあやうく吹き出しそうになったが、こらえた。

「えーつとね…」

口元をわずかに押さえながら、ひとまず椀は泣き止まない兎さんをちらと見て。

「…とりあえず、長春は刀しまつて。どこか見えないところに隠れてくれる？」

「は？」

「いや。は？じゃなくて。九割九分それで解決するはずだから」
言うなり椀は、微笑んで首をちよつとかしげた。

長春はそれが椀なりの「頼むからさつさとそうしてくれ」というサインだと読み取った。

二の太刀を柄におさめ、すぐ近くの木陰の裏へとしぶしぶ下がった。

「ちよつと長春！それじゃ頭一つ飛び出てるよ！いいよつて言うまで完全に隠れてて！」

下がるなり椀の叱責が飛んできた。しかたなく、木陰の裏にしゃがみこむ。これで向こうからは完全に見えないはずである。

「うんうん、これでよし、と」

満足そうに椀はつぶやき、そして。そんな問答を繰り返している間にも、泣きじゃくっている妖怪兎へと向き直った。

「ぐすつ…うえええん…」

顔をぐしゃぐしゃにして、相変わらず泣いているが。泣く原因を遠ざけたために、少しずつ泣き止んできたようだった。単に泣き疲

れただけかもしれないが。

椛は、ひざまずき。目線の高さを妖怪兎へ合わせた。そして、めいっばい優しい口調で話しかける。

「兎さん、大丈夫？」

「うう…ひづく…？」

泣きながら、ちらと視線が椛とぶつかった。

しめた、と椛は判断した。

「怖かったねえ、もう大丈夫だよ。刀を振り回す怖いお兄さんには、わたしが手出しさせないから。大丈夫だよ」

優しく笑顔で語りかける。そんな椛を目を見開いてみていた兎だったが、気が付いたように周囲を見渡した。

そして、さっきまで刀を振り回していた（ようにゆえから見えた）男がいないことに気が付いた。

そこで柔和そうな表情を浮かべる椛へと視線を移し（視線が合うと、椛は微笑んだ）、地べたを転がって泥だらけの自分の衣服見てようやく自分を取り戻したらしかった。

「……………あなた、誰？」

ゆえは、この状況で何を口にするべきか数瞬、諮詢した後、そう椛へ尋ねた。

「私は椛、犬走 椛。天狗の里で哨戒天狗をやってるの。あなたは？」

椛はゆつくりと、含んで聞かせるように言った。

「……………わたしは、美作 ゆえ。…永遠亭、の妖怪兎なの」

ゆえは、時折鼻をすすったりしながら、そう自己紹介した。

椛は、ゆえが「永遠亭」と言うのを一瞬ためらったのに気が付いた。一応椛も尋問の経験は多いのである。

が、ひとまずそれには触れないでおくことにした。椛は長春が決して手荒い真似をしていないと信じていたので（また、長春は子供や女というものに対してそういうことが出来ないと知っていたので）

、このゆえという妖怪兎が、何をきつかけに泣き出して会話不能になるのか、わからないという恐怖があったのだ。

「じゃあ、ゆえちゃんはどうしてここに来ちゃったの？」

「……どうして？」

「うん、そう。どうし……」

で、と言いかけて椛は固まった。そしてゆえの異変に気が付いた。わなわなと肩を震わせ、目は潤み始めていた。そしてしきりに「……どうして……？」と繰り返しつづやいている。誰が見ても、それは泣き出すサインであった。

しまった、地雷を踏んだ。かわそうと思ったのに見事に最短ルートで踏みについてしまった。

そう反射的に思った椛は、さっとゆえの肩に手を回し、軽く抱きしめるようにその体を寄せた。

「あーもう泣かない泣かない！ほら落ち着いて？ね？」

多少馴れ馴れしいかな、と椛自身も思ったが、とにかく安心させることが必要だと判断したので必死に声をかけ続けた。その甲斐あってか、それとも先ほどまでずっと泣いてていいかげん疲れたからなのか。ぐずり始めていたのが少しずつ改善されていった。

そして、落ち着きはしたものの、わなわなと震える唇で。

「……わ……わたし……は……」

と途切れ途切れに何かをつづやいている。

ゆえは必死に先ほどの質問に答えようとしているようだった。椛もそれに気づき、黙って見守る。

すると、ゆえは突然口を大きく開き、なぜか出来るだけ笑顔で、泣き出しそうな笑顔で叫んだ。

「わ、わたしは、永遠亭を追い出されたの！お、お、お師匠様に嫌われちゃったから……」

赤く腫らした目を無理やり笑顔にするため細めながら、ゆえは自分の感情を押さえ込むため叫んだ。その口と肩をわなわなと震わせている。

そうせねば、さつきよりもみつともなく、悲しい気持ちで泣かねばならなかったからである。

彼女にとつては、それは何よりも悲しくて、思い出したくない出来事であった。

ほんとうは、今すぐ泣きじゃくりたかったのだ。でも、目の前にいる栞という人のよさそうな天狗に迷惑がかかりそうだったので、できなかった。ゆえはもう、彼女のひざの上にしがみついて泣き明かしたい気分だった。それはなんとなく、栞が彼女が姉のように慕うある人物と重なったからでもあった。重なって、その人物を思い出して、その暖かさを思い出して、ゆえはまた泣き出しそうになった。

もうありとあらゆる彼女の記憶は、全て彼女を涙させる要素にしかならなかった。

そのため、何を言っても。今の彼女には無駄と言えた。

「そつか…、追い出されちゃったのか…それは大変だったね……」

栞は、慎重に言葉を選びながら。彼女の背中をばんぼんと優しく叩いた。

永遠亭が妖怪兔を追い出す？

そんなことがあるのだろうか、と思いながら、しかし一応事態の収拾を図るために、栞は優しく彼女に接した。

だが少しずつ先が見えてきていた。

今この娘は、ともかく身寄りが無いらしい。そして、

「夜、行くところはあるの？というか、住むところはあるの？」

ゆえはぶんぶんと首を振った。無いらしい。

妖怪が活発に活動する夜、そこへ妖怪兔が一匹だけうろろしていては、凶暴な妖怪に襲われることは必定である。それに加え、昼間力の弱い時にも、身を隠す場は一応もっておかねばならない。戦いが得意でない妖怪ならば、それは基本である。

話を聞けば。彼女には、行くあてがこれっぽっちもなかった。

栞はこのあたりから、この妖怪兔になんとか縄張りの外へ出て

らおうとするよりもむしろ、ゆえというこの子をなんとかしてあげたいと思うようになっていた。

彼女は自らの役目を忘れてしまうほどおせっかいではなかったが、この少女に深く同情してしまう程度には優しくかった。人情味あふれる天狗であつたのだ。

そしてそれは、最終的に事態を予想できない方向へ振り切らせる結果を伴つて、長春の前にやって来るのであつた…。

「……いつまでやってんだあの野郎」

舌打ちと共に、長春は木陰に隠れたままつぶやいた。もう椀が来てからかれこれ四半刻は過ぎてる。

最初のうちは、追い出されたたのなんだのとあの泣き虫兎がしゃべっているのが聞こえたものの、今はまるで内緒話でもしているんじゃないかと思うくらいに何も聞こえなかった。

流石に様子が気になって、何度か様子を窺ってみたが、椀と話している以外の様子はつかめなかった。

とはいえ、長春もそこまで心配している訳ではなかった。

椀は仕事のできる奴だし、あの妖怪兎が泣き出そうがどうしようが、なんとか事態を丸く収めてくれるだろう、と思つていたのだ。

要は、時間はかかっても、まあこれ以上厄介なことにはなるまいとたかをくくっていたのだ。

だが、長春は。仕事が出来る以前にある、椀のあまりに優しい部分をすっかり失念していた。

「長春！もういいよ！」

失念していたために、声に反応するなり、彼はすっかり油断して木陰から立ち上がった。

「やっと終わったのかよ、いったいつまでかかってん…」

立ち上がり、椀のいるほうへ振り向いたその瞬間。長春は自分に向かつて何か影が急接近しているを見た。そしてその影は、何か棒のようなものを振りかぶっているということまで、彼の目は見た。

刹那、その影から振り下ろされた棒のようなものは、長春の脳天を直撃した。

——ように見えたが、間一髪。長春はそれを両手で挟み取っていた。いわゆる白刃取りである。

そしてその影を注視した長春は、苦い顔でにらみつけた。

「何しやがる、椀」

「ほい、これ没収ね」

長春の言葉をさっぱり気にかけない様子で、椀は長春の懐から何かを抜き取った。

打ち込んできたのが椀だと確認して、安堵していた長春は、突然腰のあたりが軽くなったのに違和感を感じ、椀が何をしたのかと彼女の手元を見て、色を失った。

「はいゆえちゃん、これで安心できるでしょ？」

「あ、はい……」

「オイ待て！返せよ馬鹿！」

ゆえに向かつて、その手に持っている物を見せる椀。その手にあるのは——長春の太刀と脇差であった。

あの一瞬で、椀は長春の武器全部を奪い取ったのだった。

「返せこの野郎！お前なにしてんのかわかってんのか！」

長春は必死の形相で椀に食らいつく。だが、当の椀は、長春の顔を真正面に見据えると。背筋を伸ばし、胸を張って言った。

「お黙り！上官命令だよ！」

いつになく凜とした口調で、長春に言葉を浴びせる。

いや、お黙りて。

今度は長春が背筋を伸ばされる番になった。長春は、上下関係とかそういうものにこだわる方だ。

「事態を円滑に進めるため、この武具を一時没収します！異論のあるものは前へ！」

高らかに椀は宣言する。長春は苦い顔しながら、しかし気を付けをしなから一歩も動かなかった。いや、動けなかった。

ああもつ、好きにしゃがれ。という表情を浮かべている。

そうしてちと、長春はゆえの方を見た。

自分の前であれだけ愚かしく泣き喚いていた少女は、今椀の後ろで、長春につられて気を付けをして突っ立っていた。いや待て、なんでしょう前まで気を付けをしとる。

そう長春がふと思ったとき、ゆえの方も長春を見た。二人の視線がぶつかり、互いに気を付けをして棒立ちしている図に気づいたようだ。長春はなんだかバツが悪くなって、力なく微笑んだ。それを見てゆえも、なんだかぎこちなかったが、微笑んだ。

その間には、涙も刀も何もなかった。

「長春、異議はありますか？」

「……無い」

「よろしい」

再び椀の凜とした声が響き、長春は力なくそれに応答した。こうなると長春は少しも逆らえない。

椀は後ろを振り返り、ゆえに向き直った。

「ごめんねー、ゆえちゃんまで驚かせちゃったかな？でも長春を従わせるにはあれが一番だったから」

さっきまでの迫力が嘘みたいに破顔して言う。使われた長春の方は、いい迷惑だ、という顔をしてそっぽを向いて立っている。

「でも長春がそんなに悪い奴じゃないってわかったでしょ？少なくともゆえちゃんに危害を加えるような奴じゃないから安心して。」

私がいる間は安心だし、ね？」

長春としては、何をするために椀がそこまで必死に説明しているのかわからなかったが。椀の説明を聞く限り、相当自分は物騒に見えるのかと思い、少し本気で落ち込んでいたので何も聞かなかった。というよりも、まずは腰の得物が無いのに長春は落ち着かない気分であった。

「あの人危ない人じゃないってのはわかったんで……」

ゆえは、控えめに喋り出した。椀に言っているというより、その

肩越しに長春へ語りかけているようだった。

「刀、返してあげてください」

「え？」

椀が意外そうな声を上げた、長春も驚いてゆえを見た。

「いいのかよ？」

「え、あ、うん。はい、だって。なんだか、かわいそうだったから……」

長春に声をかけられて、唐突にしどろもどろになりながらも、ゆえはそう答えた。

長身の長春を見上げながら、怖がりながらもしつかり彼を見据えて言うゆえと。それをいくらか意外そうな顔をして見下ろす長春。その図がなんとなくおかしかったのか、椀はあっははと笑い出し。

「だってさ、長春」

とにやつきながら長春に向かって言った。何が、だってさ、だ。何がだ。

「ま、じゃあこの武器は没収する理由がなくなったので。返却します。はい、ありがたく受け取りたまえー」

今度は、背筋はさっきのように伸ばしながらも、声はいつもの調子で椀が刀を差し出す。顔も笑顔なので、すっかりしまりが無い。なんだかさつきよりもバツが悪い気分で長春が苦笑いしていると横合いから「わー」とかいう声共に拍手の音がした。ゆえが鳴らしているのである。

「て、コラ待て。お前のせいで没収されてたのになんでお前が拍手すんだよ！」

「ふゆえっ？あ、ご、ごめんなさい……」

とうとう抑えきれなくなって突っ込んだ長春に、ゆえはびくつと肩を震わせ急いで頭を下げる。またもや泣き出しそんな語勢と雰囲気、再び違う理由であせった長春は。

「あー…もういいや、拍手でもなんでもしやがれ！悪かった！何

でもやつちゃってくれ！」

とやけくそのように言い放った。

横で椛が笑いをこらえるのに必死になっていたが、この際長春は気にしなかった。

結局。ゆえはもう拍手はしなかったし、長春も刀をただ受け取ってその場はなにもなかったが。椛が笑いをこらえられなかったりということはある。

「なんていうか、おもっしろいなあ。ゆえちゃんと長春のコンビは」

とかどうとか言いながら、しきりにくすくすと笑う椛。それを今日一番苦々しい顔で見る長春は、それを取りあえず置いておいて、気になっている事を聞いた。

「で、何でこいつはまだここにいるんだ？ 縄張りの外まで護送でもすんのか？」

ゆえを指差し、長春は問う。長春からしてみれば、ゆえは自分が発見して自力で解決できなかった問題そのものである。これを解決する責任があると彼は思っていたので、この問題の最後がどうなるのか、気になっていたのだ。

つまりは、この兎をいかにここから追い出すのか。その方策を椛に期待していたのである。

が、予想外の答えが長春を襲った。

「え？ いや、このまま一旦帰るけど？」

「は？」

きょとんとした顔の椛と、心底訳分からんという風な顔の長春。

ああ、まだ長春には説明してなかったわけ。と椛はつぶやきながら。ゆえの肩に手を回して、まるで記念写真でも撮るようにそろって長春の方を向き。

「ゆえちゃんは、しばらくうちにいる事になったから」

そう宣言する椛の口調はいつもの調子であった。肩をつかまれているゆえは、なぜか少し頬を染めながら上目遣いで長春を見ている。

そしてその向かいの長春は、固まっていた。

樫がそんな訳の分からないことを言うわけが無い。きっとなんか意味がある。

そう思った長春は「は？」という言葉をとどの奥に飲み込んで、

5秒考えてみた。

5秒考えてみてわからなかったので、30秒考えてみることにした。

30秒考えても分からなかったので、1分に伸ばした。

1分に伸ばしてもわからなかった。ていうか、待て。なんだって？

「ゆえちゃんは、しばらくうちのお手伝いをやってもらうことになりましたー」

ねー、とか言いながら、樫が言い直す。いや待て、オイ待て。何だそれ、侵入者がお手伝い？それ以前に、そいつは里の出入りを許されて無い妖怪だぞ？

様々に考えをめぐらした挙句、結局何も分からなかった。

「……はあ……？」

力のこもらない吐息を吐くように、長春はつぶやいた。

言いたいことが山ほどあったが、ありすぎて第一声に困った。

そして気づいたように、深い森の間から見える紅い空を見上げた。そういえば、幻想郷は異変の真っ只中。空も地上も紅霧の世界であつた。

それとはまったく関係ないところで、確かに異変は起こっていた。

誰も止めに来やしない、起こりっ放しの異変。

そんなもう一つの紅霧異変が、幕を開けたのだった。

紅霧の巻・其の三（前書き）

ようやく第一章の三部です。

ずいぶんと間が空いてしまいましたが、なんとか時間を確保しつつ、ゆったりこつてり更新して行こうと思います。
それはともかく、どうぞ。

紅霧の巻・其の三

うさてん。

紅霧の巻・其の三

「まあ、何もほんとお手伝いで雇う訳じゃないんだけどね」

天狗二人に兎が一人、異様な三人組で帰路に付く間、椀はさも楽しそうにそう言って笑った。

「一応形式的には、かなり深くまで侵入した輩だから、しばらく拘留という扱いで」

「侵入者を拘留？そんなことできるのか？」

「んー、やったことないけど、出来ると思うよ？」

なんじゃそりゃあ、と長春はあきれたようにつぶやいた。

その様子を見た椀は、隣を歩いていたゆえの肩に再び手を回し。

「だって可哀想じゃない！住みかを追い出されちゃった挙句、今は異変の真っ只中。妖怪の山に迷い込んだからいいものの、他の場所だったら何に襲われてもおかしくないんだよ！？」

「別にいいだろ、放っておいても。それで襲われてもそいつは自己責任だ」

「うわー、長春冷たい」

「それが当たりまえだ」

椀はほおを膨らませて長春に向き直った、長春も己が間違っている気は毛頭無いので、きつと睨み付ける。

すると、椀はつかつかと長春に寄ってきて、ちょいちょいと顔を寄せるように手振りで要求してきた。

椀と長春も、それなりに身長差がある。内緒話のようにささやくときは、長春が体を折らなければならない。

「…なんだよ」

「いいから、ほら」

長春は渋ったが、体を折り、椀の口元に耳を寄せた。

「…他のみんなにも言つて無いことなんだけどね？」

椀が静かに囁きはじめた。多少深刻そうな空気に、長春も少し身構える。

ゆえが不思議そうに二人の様子を見守る中、椀は続けた。

「紅い霧が出始めた頃から、『河童』の方で報告があがつてるんだよ」

「なんだって？上のほうからは何も言われて無いって…？」

「うん、上からは言われなかった。他の管轄の娘から聞いたの」「で、何だって？」

長春は囁きながらも、興味津々といった風であった。

「山の外で、妖怪の活動が活発になつてる。それも、かなり。縄張りに入ってくる妖怪の数が異様に増えたんだって」

「それはまたなんでだ？」

「わかんない、でも。見た感じだと、最近吸血鬼が湖の方に住み始めたじゃない？めちゃくちゃ強いってうわさの。あれの部下になった奴らがやたらと動いてるみたいよ」

「てことは、この異変はその吸血鬼が。ってことが」

「多分ね」

「で、なんでそれを今言うんだ？」

「え、だから言つたじゃん。妖怪の動きが活発になつてると」

「…それがどうしたんだよ」

「だーかーらー、危ないじゃん、異変が起きてる間ゆえちゃんがふらふらしちゃ」

「……アホか」

こつん、と長春は椀の額にゲンコツを下ろした。

「いったーい、と言いながら、しかし特にダメージはなさそうに椀は笑っていた。」

「でもさ、異変が起きてる間くらいはさ、いいじゃん。ね？」

「あのなあ……」

と長春は反論をしようと思ったが、椀の口がまさに「上官命令！」
とでも言い出しそうな感じであったので、口をつぐんだ。

そして顔を寄せ合う二人を、不思議そうな目でみているゆえへ視線を向け、そのゆえは長春の視線にまた不思議そうに首をかしげ。
空を見上げて、紅い霧で霞んだ空しかないことを確認し、長春は認めたくなかったが、自分に加勢してくれる影など皆無であると自覚して。大きめにため息をついた。

そして、だいぶ不服そうに。

「…勝手にしやがれ……」
とつぶやいた。

すると椀は、にこつ、とさも機嫌よさそうな笑みを見せ。

「よしっ、じゃあ決まりね！」

というや否や、呆然としているゆえの手をとり、さっきと同じように帰路へついた。

その後ろをとぼとぼといきながら、長春は、椀ってこんな奴だったっけか？という疑問が脳裏をよぎらずにはいらなかったが、特に深く考えるのもやめておいた。

なんというか、長春としてはもう勘弁してくれ、という感じだったのである。

さっきまで追い掛け回し、なんとか追い出してやろうと思っていた妖怪兎が、しばらく側にいることになったというのだ。

どんな急展開だよ、と長春が言いたくなったのも察して欲しいところである。

そして、

「ああそれと、」

ここで突然振り返った椀が放った一言は、さらに長春に追い討ちをかけることになった。

「ここにいる間、ゆえちゃんの身の安全は長春が守ってあげてね」
当然のことのように椀はそう言った。

もっ何を言われても驚いてやるもんか、と思っていた長春は。仏

頂面で椀と向き合っていた。

そしてそのままの表情で。

「……あんだって？」

口の端をひくつかせながら、聞き返した。

「だから、あたしたちのところにいる間、ゆえちゃんを守る役。

ボディーガードね」

「ふざけんな、要はコイツのお守り役だろ？それこそお前がやれ」

「そうしたいところなんだけどねー、そうはいかなくてねー」

椀がなぜかにたにたしながら言う。

「わたしは色々役目とかで、『奥』とかに行かなきゃいけないし、いつもゆえちゃんに付きっ切りって訳にはいかないのね。流石に『奥』の諸連中とか他の管轄のコたちのところについてこさせる訳にもいかないしさ。もちろん世話わたしはやるけど、いつも側にいて見守る役がないわけよ」

「要は、どうしろと？」

「ゆえちゃんの半径三メートルから離れないでね」

「……ふざけ——」

「ま、二人とも相性よさそうだし。大丈夫だよねー」

長春の愚痴すら許さずピシヤリといい放つや、椀は長春の肩に手を置き。

「てことで、よろしく」

と言いのたまった。それもかなりいい笑顔で、言い放った。

長春は正直、本気で殴ろうかと思った。

「なー、侘助。椀なんか遅くね？」

滝の裏にある洞窟、椀たち哨戒天狗の待機所とも呼べるところで、

西北がそんなことをつぶやいた。

椀が出て行く頃にはじめた将棋は、どうやら西北の圧勝で決着がついたらしく、西北はけだるそうに横になっていた。その少し離れ

たところで、納得がいかない顔で将棋盤とにらめっこしている椿がいる。

「そうだね、そろそろ出てから半刻（一時間）くらい経つからね」「西北ー！やっぱりおかしい！いかさましてるだろー！」

侘助が答えるのとほぼ同時に、椿が西北に大声で叫ぶ。当然のことだが、洞窟の中で大声を出せば、反響する。

「だあー、うるせえ！大体おまえどの口がいかさましてるなんて言いやがる、囲いを作れるようになってからほざきやがれ」

「『かこい』ってなんだ？！いかさまの手口か？」

「…お前な、勝ちたけりや将棋もうちつと勉強しろ。それと、将棋でいかさまなんてそうそうできねーよ。どんくさいお前でもいかさまなんてされないから安心しろ」

「どんくさくないよ！」

「うるせーっての、やまびこかお前は、とにかくもう少し頭を使え頭を」

「将棋で頭って使えんのか…？」

「え、なに、お前の中で将棋ってなんなの？」

言い合いを始めてしまった二人を、いつの間にか蚊帳の外におかれてしまった侘助はほほえましい、といった表情で眺めていた。

そしてふと、

「やつぱり仲良いね、二人とも」

とつぶやいてみると。

「よくねえよ！」

「よくないよ！」

と、すさまじい速度で同時に返ってきたのだった。

そして再び言い合いに戻り、ついに取っ組み合いまで始めた二人を侘助はにこにこしながら見届けつつ、ふと洞窟の出口の方を眺めた。

「…でもまあ、ほんとに遅いんだよね。二人とも」

侘助の言う二人は、もちろん今目の前で取っ組み合いをしている

二人のことではない。

だが流石の侘助も、二人がまさか三人になっているのだとは、予想すらしていなかったのだった。

「ただいまー」

滝の裏にある洞窟に、駆けて出て行つた椀の聲が響いたのは、彼女が洞窟から出て行つてから半刻と少しが過ぎた頃であつた。

「おう、帰つてきたのか」

「椀ちゃんおかえりー」

「お帰りなさい椀さ…」

取っ組み合いがなんとか終わつた二人は、侘助の仲介の元、椿は西北が持つている将棋の本を借りることになり、椿はそれを熟読していた。西北は侘助がどうも椿よりの仲裁をするので、不貞寝と思われる昼寝と見せかけた狸寝入りをしてそっぽを向いていた。西北が本気で寝るときは仮眠用の洞窟に行くので、ばればれと言える。

椿は夢中で本を読んでいて、椀が帰つてきても顔を上げなかった。西北はそっぽを向いて寝ているので、入ってきた椀たちを見なかった。たふりをし

結果として、洞窟の中で招かれざる客に気が付いたのは、最初侘助だけだった。

「……椀さん…その娘は…？」

侘助の目が若干見開かれ、明らかに驚いた様子でそれについて質問した。

彼がこういつた表情を見せるのは、かなり珍しいことである。

「ああこの娘？今紹介するから待っててね」

楽しそうにそう言つた椀は、問題のそれを洞窟の奥へ引つ張つていった。

「長春…あれは一体…」

侘助は椀から聞き出すことをあきらめ、すぐ後に続いて来た長春に質問を投げかけた。

が、長春の方が既にいろいろとあきらめた後のような様子であり。侘助の問いに対しても、残念そうに首を横に振っただけであった。参考までに言うと、長春がこうした様子なのも珍しいことなので、侘助は二重の意味で驚いた上、一体何が起きたのかと不思議に思わざるを得なかった。

「えーえー、みんな聞いてー」

洞窟の少し奥で、椀は手を叩きながら注意を促した。

侘助、西北、椿の視線がいつせいに集まる。長春はもう疲れた、という感じで侘助の隣にへたれこんであり。椀を見ていなかった。

「…誰だ、それ」

「あれ、だれー？」

初めてそれに気が付いた二人が、同時に疑問の声を上げる。

椀はそれに答え、楽しそうな様子でその両肩に手を乗せ。

「紹介します、今日からしばらく私たちのお手伝いをする事になった、妖怪兎の美作ゆえちゃんです！」

といいのたまった。

元々反応の薄い西北は「あーそう」と興味なさげであり、よくわかってない椿は「おーすげー！新入り！」と声をあげ、侘助だけが無言でなんともいえぬ微笑みを浮かべていた。長春はうなだれている。

その後の椀の紹介は、つまるところ彼女が聞いたゆえに関する話を延々とするのみであった。長春に限っては、実を言うとゆえの話をほとんど聞かされていなかったため、彼女が永遠亭を追い出されたらしいと言うことすら初めて知ったのだが、それはまあ置いておいてひとまず、拘留という扱いにして、紅霧の異変が落ち着くまでここで預かる。という椀の提案に、反対するものはおるか、大してそのへんを気にする者もいなかったようである。

椿なんかは同世代（のように見える）ゆえを期待に満ちた目で見ている。

「妖怪兎には手を出すな、永遠亭とやっかいを起こすな」という

大天狗の指示が頭にひっかかっているのはどうやら長春だけらしい。ここでも長春は盛大にため息をついた。せめて侘助ぐらいは反論してくれるんじゃないかと淡い期待を寄せていたのだが、侘助はにこにこしながら、まあいいんじゃない？という表情を見せていた。

「なあ侘助」

とうとう長春は、たいして問題を感じていない様子の侘助に軽い憤りを感じつつ、声をかけた。

「何？」

なんでもなさそうに返事をする侘助に、拍子抜けたような感じがした長春だったが、めげずに言った。

「お前、いいのかよ、アレ」

「いいのかよって、どういうこと？」

「ここに置いてちゃ、そのうち問題になるのは明らかだよ」

「まあ、大天狗の指示もあるしね」

しれっと言い放つ侘助に、長春は心底あきれた。

「お前それをわかって何も言わないのかよ？」

「じゃあ、長春が樫さんに言えば？」

「…もう言ったよ、ていうかお前それもわかってるだよ」

「あはは、まあね。でもだったら、僕が言っても変わらないよ」

「いんや、俺と違ってお前は頭脳派だ。樫だってお前からの忠言なら聞かざるを得ないだよ」

「いや、そんなことはないよ。長春が言っただけなら、誰が言ってもダメだよ」

「は？なんでだよ？」

「んー…ま、それは長春が気づくことだから。ある意味気づかないほうがいいのかもしれないし」

「はあ？」

「まあ何よりさ、樫さんがいいって言ってるからいいんじゃないの？」

「そういうわけにはいかねーだろ、後で連帯責任になるぞ？」

「またまた、そう言っつて、本気でやめさせるつもりは無いんでしょ」

「なんでそうなるんだよ」

「楽しそうだもんね」

「ああ？」

「栞さん、楽しそうだから。それでつい丸め込まれちゃったんでしょ？ほんとにまずい時は無理にでも止めるもんね。長春はさ、そういう無言の優しさがあるんだよ。自分で気づいてないみたいだけど」

「……くだらねえ」

そう言っつて長春はそっぽを向いた。長春は、自分がほめられることにあまり抵抗がない。

侘助がそれを知っつていて、長春の矛先をかわしたのはもはや言うまでも無い。

「あはは、ま、力にはなれないよ。ごめんね、お守り役ががんばつて」

もはや皮肉のようにしか聞こえない侘助の言葉を、長春は最初と同じようにうなだれて聞いた。

あー、どこにも俺の味方はいないのか。と、失望に似た呟きを、胸の中でそつと済ませたようであった。

「……というわけで、みんなゆえちゃんと仲良くしてねー」

長春と侘助のやり取りが終着したころ、栞によるゆえの紹介も終了したようであった。侘助の言う通り、栞はかなり楽しそうな様子に見える。

天狗五人の中に、妖怪兎が一匹。

なんとも異様な集団による共同生活が、幕を開けたのであった。

まず最初にゆえと打ち解けたのは、年齢的に（多分）一番近そうな椿であった。

正確には、精神年齢が近いのかもしれない。

樫による紹介が終わるや否や、期待に胸膨らませている様子（樫の場合、どうもゆえをただの新入りと見ているようで、ゆえが妖怪兎であること自体理解しているか危うかったが）の樫は。

ゆえの目の前に来るなり、

「はじめまして！あたし北平椿って言うの！椿って呼んでね！それよりゆえちゃん将棋やったことある？ないの？じゃ、やろうよ！将棋やろう！今すぐやろう！」

とかなりのハイテンションで言うや否や、将棋盤を引っ張ってきてゆえに将棋を教え始めた。

最初は戸惑っていたゆえであつたが、樫のあまりに純粹で子供な性格が功を奏したのか、二人で楽しそうにおしゃべりしながら将棋を指していた。

そしてその様子を見守る樫も会話に加わりながら将棋を指しているの、時たま将棋よりもしゃべりの方に意識がいつているように見えた。それも結構な大音量でしゃべっているの、女三人集まればかましいとはよく言つたものだ、と長春は思った。

その長春は、不貞寝から復活した西北と大将棋を指していたのだが。

「よくもまあ、ああもしゃべりながらできるもんだ」

「おい長春、そつちを気にしていいのかよ？つと」

「集中して打とうがどうしようが、お前には勝てねえから別にいいんだよ、つと」

「おいおい、勝負事には真剣になれって師匠が言つてただろ？」

「修行ほつたらかして将棋に熱中した奴にいわれたくねえよ。大体お前あれからお師匠様に会つたのか？」

「…ほれ、王手だぜ長春」

「……聞かれたくねえなら言うなよ……」

こちらはあまり会話がはかどらなかつたようである。

「椛さん、『奥』からお使いが来てますよ」

洞窟の入り口の方から、侘助がそう言ったのはそれから大分時が経って、外がすっかり暗くなってからであった。洞窟内では、たいまつをつけて灯りを確保している。

その報告に、身構えた長春であつたが、その他大勢はなんとも思わなかつたようである。

「えー？何の件で？」

と椛がごくごく普通に問い返した。

「たぶん、明日以降の紅霧への対応じゃないかと。『奥』に召集がかつてゐるみたいですよ」

「あーそう、わかつた。今行くつて伝えて」

「わかりました」

そう言つて、壁に立てかけてある大剣を背負い、出かけようとする椛に。

「おい椛、大丈夫なのかよ？」

心配した長春は流石に声をかけた。

「え、何が？」

「何が？ってお前、アレのことだよ、ばれたんじゃないのか？」

「ゆえちゃんのこと？大丈夫だと思うけど」

しれつと言ひ放つ椛に、多少脱力しながらも長春は言つた。

「何でそういえるんだよ、大天狗の耳に入つたとしたら、お前生きて帰れないぞ？」

「あはは、もし大天狗様にばれたとしても大丈夫だよ」

自信満々そうに、椛は笑つた。

「だつて私たち、ゆえちゃんには『手を出して』いないもの。ゆえちゃんは、自分の意思でここに来て、ここにしばらくいる事になつたの。私は事態をややこしくしないために、ゆえちゃんがここにいるのを許可しただけ」

「…それ、屁理屈だろ」

「うん、まあね」

あきれた顔の長春に、椛はまた笑って答えた。

「でも大丈夫、大天狗なんて、長春よりもくそ真面目な奴だもの。屁理屈だろうと、理屈で通されると反撃できないの。それに今回の召集は、朝から決まってた事だから心配はいらないよ」

「しかしなあ……」

それでも心配そうに長春はうめいた。

そんな長春を見ながら、椛は微笑みつつ言った。

「大丈夫、いざ、というときは長春が助けに来てくれるでしょ？」

「……どういう意味だそれ」

「あ、ひどい。そこは女の子相手なんだから『まあな、任せとけ』って言うのが筋でしょ」

「あのなあ、お前。俺は本気で心配して……」

からかわれて少々憤慨気味に口をひらいた長春の唇に、椛は人差し指で蓋をした。

「今は大丈夫だから。でも、本当にまずい時は『助けて』って言うから、そのときは助けてね？」

長春を上目遣いで見上げながら、椛は言った。

その表情が少し赤らんでいるのに、長春は気づかないふりをしつつ。

「馬鹿野郎、そうなる前に言え」

こつん、と力を入れてないゲンコツを椛のひたいにお見舞いした。えへへ、いったーい。と笑顔でつぶやく椛を、長春もまた少し堅いながらも、微笑んで見ていた。

「ま、そんなことで頼りにはしてるからさ。それより、私がいない間ゆえちゃんをよろしくね」

そう言って、椛は洞窟の出口へ走っていった。

外で待っていたらしい『奥』からの使いと一緒に『奥』へ向かったらしい。

まあどうせ、紅霧への対応とか言っても、外界干渉のこの里の

性質上、何もしないのが関の山だろう。と長春は見ていた。
それよりも彼にとっての問題は。

椀が出て行くのと同時に、はやし立てるように、ひゅーっと口笛が響いた。

「……おい椿、こりゃ白馬買っておかねえとな。王子様のお迎え用に」

「え、こういうときってお赤飯じゃないのー？」

「おいお前そんな事で教わった、直接的過ぎるぞ。まあアリだけど」

「え、お赤飯ってお祝いの時に炊くやつですか…？」

「おー、うさぎさんよ知らないのか？アレはな、男女のつがいがおめでたいことになったときに炊くんだよ。ほら、今みたいなのかな」

「オイお前らマジでたたつ斬るぞ」

「おい長春、初夜はいつだよ？赤飯炊かないといけねーんだ」

「西北、てめえは八つ裂き決定な」

「おい待て、長春。わるかった、マジで謝る、このとおりだ、だからそのマジな目で柄に手をかけんのをやめてくれいやお前のはしやれにならないからマジでおい待てやめろわかった土下座するから頼むやめてくれほんとだこのとおりだから勘弁してくれ頼む」

「すげー…、西北が土下座してる…」

椿が心の底から感心したようにつぶやいた。それくらい見事に西北の体は完璧な土下座の体勢を取っていた。ゆえはどういう顔をしていたのかわからずにいる。

西北のあまりあっさりとした降伏の体勢に、半ばあきれつつ長春は柄から手を離れた。

「あのなお前ら、一応言っとくが。俺と椀はそんな関係じゃねえからな？」

「えー、でも。椀ちゃんこないだ長春のこと好きって言ってたよ

「？」

椿がしれつと言い放った。その発言に、長春の動きがピタリと止まる。

明らかに動揺の色が見て取れた。

「オイそれマジかよ、こりゃ」

「斬るぞ」

「ハイすいません」

西北が土下座したまま声を上げたが、すぐになりを潜めた。

土下座した西北を威圧した後、長春はいたって普通にしている椿に向き直った。

「…もし仮に椿がそう言ったとしても、俺は知らん」

「じゃあ、長春は椿ちゃんのこと嫌いなのか？」

「そうは言ってねえ」

「じゃあ、どう思ってるのか？」

椿がごくごく普通に、まるで今日の天気のことを聞いてるみたい

に言う。長春には、椿に彼を追及する意思が無いことが痛いほどわかって

いるが故に、逆にその言葉が突き刺さるように痛かった。

「…そういうことじゃ、ねーんだよ。こっいつのは」

「ふうん、そうなんだ」
結果として彼には、意味のない言葉で否定することしかできなかった。もっとも椿もそれにさして疑問を持っていて風でもなかった。彼女にとっては『そんなものなのだ』ということぐらいの認識なのだろう。

長春は、人知れず下唇を噛んだ。

えもいわれぬ悔しさが、彼を満たした。

「えーと…、話に割り込んで大丈夫かな…？」

すると、いつのまにか帰ってきていたらしい侘助が、非常に言いづらそうに口を開いた。

長春はおぞましい殺気を放っており、西北は土下座体勢のままび

くりとも動かない、椿はすでにゆえとおしゃべりに興じていた。ゆえの方は長春の殺気にあてられて気が気でなさそうであったが。

そんな異常な空間の中、侘助は長春の間合いに入らないよう若干の距離をとりつつ。長春の様子をうかがっていた。

「…あんだよ、言え」

長春がそうつぶやくのを聞いた侘助は、機嫌の悪くならないうちに、と。多少早口で話し始めた。

「今日の夜勤さ、僕と椿さんの担当なんだけど。長春と代わっておいたほうがいいなあと思って…」

「ああ？」

長春の表情がおぞましいスピードでゆがむのを見て、侘助はあわてて付け足した。

「いや、だつてゆえさん多分洞窟に泊まるでしょ？じゃあお守り役の長春もここにいなきやいけないじゃん、だから…」

「……椿と俺が代わればよくねえか？」

「いあ…でも多分、椿さんゆえさんが気になるから、夜勤すると思うよ…」

長春があつ、という表情をして、考え込んだ。

夜勤というのは、文字通り夜間の哨戒任務のことだ。これは各小隊（各洞窟で）二名が担当することになっている。夜間は妖怪の領分であるため、夜勤の方が人数が減るのはおかしいと思うかもしれないが、夜間に休みがあつた方が妖怪的には遊びや宴会を全力で楽しめるので、このシステムが好評なのだ。

もっとも、年季の入った天狗などは、昼だとか夜だとか境目がなくなるのだから。

「…そうだな、侘助悪かった、代わってくれ」

「うん…、まあ、がんばってね…」

侘助はどこか申しわけなさそうに、恐怖で顔を若干引きつらせながら言った。

「おいおい、真夜中に二人つきりとか…」

「輪切りと薪割りどっちがいいか選べ」

「ごめんなさい」

西北が土下座したまま何か言ったが、またすぐになりを潜めた。西北がしゃべらなくなったのを確認してから、長春はちらりとゆえを見た。

ゆえの方は、椿と話し込んでいたため気づくのすこし時間がかかったが、首をかしげながら長春を見つめ返した。

長春はしばらく無表情でゆえを見ていたが、すぐに興味を失ったように視線をそらした。

そして、その視線は流動的に、椀が出て行った入り口へと向けられ。そこからも、しばらくしてから視線をはずした。

その後は、特に何事もなくお互いが思い思いに過ごした。

椿とゆえは雑談に花を咲かせ、ゆえには医術の心得があるので、そこらへんに生えている薬草で簡単な薬をつくることができるらしく、椿がその薬作りを見たいとだだをこねていた。

侘助は、なにやら年季の入っている本を読んでいた。どうも不気味な笑みを浮かべながら読んでいたので、いい内容では無いことだけは確かであった。

長春は何をするでもなく、座り込んで物思いにふけていた。何を考えているのかは、誰にも想像がつかなかった。

ちなみに西北は、ずっと土下座したままだった。

そうして徐々に夜は更けていった。

外の世界では、紅霧の異変が発生してから丸一日が経過しようとしている。

そして洞窟の外では、夜の闇にまぎれて紅霧がさらに濃くなり始

めていたのだが。

彼らがそれに気が付くのは、この夜が明けてからの話である。もっとも彼らにとってこの紅霧は大して影響がなく。そのためまったく気にすることでもなかったのだが。

濃くなり始めた紅霧と共に、彼らにも異変の足音が迫っていたのであった。

妖怪の山が迎える、本当の紅霧異変は、すぐそこにまで、迫っていた。

何も知らない闇は満ち。
夜が、更けていく――。

紅霧の巻・其の三（後書き）

紅霧の巻、第三部でした。

うさてん。は基本的に、原作のシナリオの裏を描く展開が多くなります。

裏を描くので、表の展開や出来事はほとんどこの作品には出てきません。ほんのり原作のあれがここに影響を及ぼしてるんだな。というところがあるかもしれませんが、それが物語に大きな影響を与えることはあまりありませんw

まあそんなことよりも（え

今回は、今後このお話の核になってくる人間関係があらわになってくるところになります。おそらく紅霧の巻自体は次の第四部で完結する予定ですが、ここで出るもろもろが、今後のお話でも重要な役割を果たして行きます。

今回、そんな重要な今後への「鍵」を書きあげることが出来たので、なんとかほっとした次第です。それでは次回の更新はまた一カ月以上先になるかもしれませんが、なんとかそうならないように頑張りたいと思います。

ネタがあるので時間が欲しい。

紅霧の巻・其の四（前書き）

こんなペースで長編の続きを書いたのは初めてです。

勢い任せの感があります、ついでに第四部でまとまりませんでした。そして勢い任せの割に、いつも通りのグダグダ展開です。では、どうぞ。

紅霧の巻・其の四

うさてん。く紅霧の巻・其の四く

暗闇がすっかり外をおおった頃であつた。

多くの天狗が暇を与えられ、それぞれの持ち場を離れる時間、深夜。

紅い霧は、妖怪の山を深くうつそうと包み始めていた。

「おい、布団敷くからそつち持て」

この日、佗助と交代で夜勤に入つた長春（「お守り役」）は、普段待機しているときに使っている洞窟から移動し、当直用の洞窟へと移っていた。

もちろんそこには、問題の妖怪鬼・ゆえもついてきている。

当直用の洞窟、と言えば聞こえがいいが、其の実態は普段の待機用の洞窟と大差はない。むしろ狭い分窮屈であり、無意味に机と椅子が置いてあつたりする以外は、ただの洞窟である。

その辺分ける必要も無いのに、用途によつて細かく洞窟を分けるあたりが無駄に真面目な天狗たるゆえんというかなんとか。

ちなみに椀は、日が暮れた頃『奥』に呼ばれてから帰ってきていなかった。

「……おい！聞いてんのか！」

長春が呼んでいるのに、返事もせず。ただぼーっと座り込んでいるゆえに、長春は声を荒げた。

長春の声に「ひゅええ！」といつか見たような反応を示した後、腰を抜かしたような様子でへたりこみながら、ゆえは長春を見上げ

た。

それでも長春を見ながら、何をすればいいのかわからない、という表情をしていたので、長春はあきれながらも、補足説明をしてやることにした。

「仮眠室から布団取ってきてやったんだ、お前が寝る布団なんだから敷くのをお前も手伝え」

「あ、はい…すいません…」

別段怒られるわけではない、と理解したので安心したのか。立ち上がって、とてとと長春の方に駆けてきた。

どこかたどたどしい仕草で、布団を広げる。

「あ、あの…」

布団を敷きながら、ゆえがためらいがちに口を開いた。

「あんだ？」

だいぶめんどくさそうに長春は応えた。

お世辞にもこころよく話を聞いてくれるというわけではない、という態度に、ゆえはうつかり口をつむぎそうになったが、こらえた。弱々しいながらも言葉を発する。

「長春…さん、と椀さんの、布団はないんですか？」

長春、と名前を呼ばれた時、長春の表情が若干ゆがんだ。

「……ない。夜勤は夜通し起きてるからな」

「そんな、それじゃ私だけ寝てられないです…」

「いいんだよ、どうせ起きてても何も起きねーから寝とけ」

「でも…」

「寝ろ」

「……はい」

それ以前に兎は夜行性です。とゆえは言いたかったか、すごく機嫌が悪そうなのでやめておいた。

すると頭をぼりぼりかきながら、意外にも長春が口を開いた。若干言いつらそうにしながら。

「それとな、椀はともかく、俺に敬称つけて呼ぶのはやめろ」

言われた途端、ゆえはもっていた枕を持ったまま固まった。少し頭で言葉を解そうとした後、やはりよく事情が飲み込めなかったよ
うで、え？と首をかしげた。

「お前だつて妖怪だ、身なりは幼いが、どっちが年上かなのかなんてわからん。ひよつとしたらお前さんのほうが年上かもしれんな、とにかく、敬称をつけんな」

「え…でも、この洞窟では先輩になりますし…」

「いいからそうしろ、俺は敬称つけて呼ばれるのが嫌いなんだ…」

…俺は、そうやって呼ばれるべき野郎じゃない」

長春の言葉の最後は、まるで独り言のように消え入りそうな声であった。

ゆえはその様子を不思議に思いながらも、ひとまず言うことは聞いておこうと心に留めておいた。

「じゃあよ、すぐに椀が戻ると思うから。ここで寝てろ」

長春はどこかバツが悪そうに、枕を抱きかかえたままのゆえにそう言い渡すと。腰に下げた刀を気にしながら洞窟の出口へと向かうとした。

「え、あの、どこへ行くんですか？」

「見回り。椀が帰ってくる前に済ましておく」

首だけゆえのほうに振り向きながら長春はそう言った。「あいつああ見えて疲れてるから、先に済ましといた方がいいんだよ」と聞きもしない事情も答えてくれた。どうも椀に関する話題だと話すのにあまり障害がないらしい。

だが、すぐに首だけ振り向いた長春の顔が不機嫌そうに歪んだ。ゆえが枕を布団の上におとすやいなや、長春のそばへ駆け寄ってきた。

「私もついていきます」

と言つて長春の横につく。

「阿呆か、お前を外でうるつかせる訳にくいかよ、寝とけ」

「でも…長春さ…長春はお守り役だから、三メートル以上離れ

ちやいけないんじゃない？」

「う、」

長春は嫌なことを思い出したようにうめいた。
どうやらすっかり忘れていたらしい。

「……なら、見回りは栞が帰った後に……」

「私、栞さんに無理して欲しくありません。長春、だってそうなんですよ？」

敬称を反射的につけてしまいそうになり、名前のところでつかえながらもゆえはそう言った。

じらっ、と多少じめじめした視線で長春はゆえを見下ろした。その瞳がものを言わなくても何を言いたいか分かる、「めんどくせえ……」と瞳が語っていた。

「……どうせ襲い掛かってくる輩もいねだろうが、外出る時は、俺から絶対離れるな。他の管轄の連中が見えたときは、茂みに潜んで俺がいいというまで出てくるな。いいな？」

意識すると、「仕方ないからついて来い」である。

「はい！」

ゆえはその言葉ににこつと微笑みながらうなずいた。

その様子に、長春はけっ、と多少気にいらなさうにしながらも、どうやら大きく機嫌を損ねてはいないらしく、ごく普通に出口へと歩み出した。

その後ろを、ゆえは言いつけ通りぴったりとついて歩いた。

二人とも、ただの散歩に出かけるような感覚で洞窟を出た。

この時は、まだ。

「おい、離れるなよ」

「うん、大丈夫」

真つ暗闇の山を、二つの影が飛んでいた。

わずかに月明かりの照らす空は、かなり用心深く見ないと二つの姿を見失ってしまいそうなほど、闇のとばりを下ろしていた。

そのわずかな月も、今はうす雲の中に隠れてしまっていた。

今は触れ合うほど近づいてもお互いの姿が見えない、本当の真つ暗闇である。

その黒い夏の風を、二人は切って飛んでいた。

「兎の目は、暗いところで見えるようにできてるから。長春よりよく見えてると思うよ」

飛んでいる影のうち、後ろの方がそうしゃべった。心なしか、その口調は早口であった。

「ふん、便利だな」

「…天狗の目だと見えないの？」

「ほとんど見えない。少なくとも目は、役に立たん」

「うそ、だって夜は妖怪の時間じゃない。夜目が利かなくてどうするの？」

「…少なくとも俺は、大丈夫だ。他の感覚で補う」

「…たとえば？」

「椀は、耳と鼻が利く」

「……長春は？」

「……勘。」

「…ぷっ」

「オイ斬りたいかお前」

「ごめんなさい、でもさ」

「あんだ」

「それじゃ、見回りの意味無いんじゃないの？」

「ふん、まあ見てろ」

そう言うなり、長春は懷をまさぐって、何かを取り出した。取り出したそれを、後方、ゆえの方へ投げる。

「わっ？え、何これ？」

「その辺で拾ってきた木の実だ、好きに間を計って、そいつを俺に向かつて投げてみる。ぶち当てるつもりで投げて構わんぞ」

ゆえの前を飛んでいる長春からは、真後ろにいるゆえの姿は見えないはずもない。少なくとも夜目の利かない長春は、投げられる木の実を察知することなどできない。はずであった。

「ええ、いいの？」

「はっ、むしろ当ててみる」

「む、言つたなあ。よし……」

しばらく無言の続いた後。ゆえは無言無音で、しかしかなりの勢いをつけて、木の実を長春の背中に投げつけた。

ゆえは、予想以上に早いスピードで長春に迫る木の実を見て。これは流石に捕れも避けられもしないだろう、と思った。ばしっ、という音がするまでは。

長春の左手が、背中に回った左手が、見事に木の実をキャッチしていたのを。ゆえ自慢の夜目は捉えた。

「ええ！すごい！なんで捕れたの？」

「俺はな、目で見えなくても何がどこにあるのか、わかるようになってるんだ。そう仕込まれてるんだよ」

「でもどうやって……わたし音も立ててないし、長春はこつちをちつとも見なかったし、そもそも暗闇だし……」

「だから言つただろ、勘だつて」

「ほんとうに？」

「本当だ。そういう奴だっているさ、この幻想郷は広いんだぜ？」

「ふうん、じゃあわたし、まだ知らないことだらけだ」

暗闇の中でもわかる笑い声で、後ろの影がそう言った。

「……永遠亭を放り出されるまで、他の場所に行ったことはなかったのか？」

「……うん、あんまり。外に行くときはいつも誰かついてくれながら、少し遠くへ行くとすぐどこにいるのか分からなくなっちゃつて……」

「それで何でここに来たんだか」

「だって、一番高くて目印になった山がここだったんだもの」

「そんな理由なのかよ……あのな、一個いいこと教えてやるよ。バカと煙は高いところがお好きってな。高いところに住んでる奴はたいていロクな奴じゃない。覚えとけ、生きる知恵だ」

「えー、長春たちだって住んでるじゃない」

「俺たちは山の下の方だからいいんだよ。上の方に住んでる奴は本当にロクでもねえんだ」

「樫さんと話してた、大天狗って人たち？」

「そう、あいつらはほんとにロクでもない」

「どんな人たちのの？」

「頭も実力も無いくせに、威張り腐ってやがる連中さ。あー、思いつくだけで腹立つ」

「そんな人たちが上司なの？私のところではそんなことなかったなあ」

「じゃあどうだったんだ。……あー、聞かない方が良かったか？」

「……ううん、大丈夫。……私のところでは、お師匠さまは厳しかったけど、わからないことはちゃんと教えてくれるし。私の……上司、みたいな人は、やさしくてお姉さんみたいに接してくれて。兎のリーダーの子は、いたずら好きだったけど賢くて、すごい子だった。他のみんなも、楽しい子たちばかりで……」

「……」

「ほんとうに、すごく、よくしてくれるところだったの」

「……そうか」

そこでいったん、会話が途切れた。

長春は、なんとか「すまん」と謝る語句を飲み込んで、そして聞き返したことをやはり後悔した。

すこし気まずい沈黙が訪れた。

月明りは、まだうす雲に隠れて姿を現さなかった。無音は闇を強めるように、広がっていく。

生暖かい風が吹き、黒だけが空間に染みていった。

二人の耳には、しばらく暖かい風を切る音しか入らなかった。

「椀さん、」

だがまた、闇と風の隙間を縫うようにして声がした。

「ああ？」

「椀さん、わたしたちがいなくなつてびっくりしないかなあ……な
んて」

「はっ、そんなことか。大丈夫だろ」

「…そ、そっか」

「……………」

「……………」

「おい、兎はよ」

「へっ!？」

「夜目は利いても、暗闇は怖いのか？」

「…………ええ？な、なんで？」

「態度だ」

「へ？」

「飛んでから。お前急に態度がでかくなつた。ため口になつたし
な。それとよくしゃべるし」

「そ、それが何で」

「威嚇つてあるだろ、敵が来たときに自分は強いって誇示するん
だ。だから本当に怖い想いをしてる時つてのは、誰でも強気を装お
うとする。自分の弱点を本能的に隠そうとするのさ」

「……………」

「はっ、別に責めてるわけじゃない。誰でも怖いもんはあるし、
ため口なのも大して気にしてねえよ。そんなもん気にする奴が気に
するだけだし、しゃべる意味が変わるわけじゃないしな」

「…いや、その通りだと思つて」

「そうか？ふん、そいつあ光栄だな」

月にかかつていたうす雲が、少しずつ晴れてきていた。

うつすらと、空から光が漏れてきていた。

ただ、その色が若干紅に染まっていることに。

次に発せられた言葉で、二人は気がつけなかった。

「……じゃ、わたしからも一つ」

「……ん？」

「長春も、暗いところは、やっぱり怖いの？」

「………は？」

「態度。」

「……あ？」

「わたしが話しかけても、なぜか普通に答えてくれるんだもん。おかしいなーとは思ってたの」

「………」

「まるで椀さんたちと話してるみたいに普通に。いままで、ちゃんと話してなかったから、嫌われちゃってるのかと思ってたけど

……暗闇のおかげかな？」

「……けっ、知るか」

「あはは、だよね……真似してごめんなさい」

「………」

「………」

「………椀が、お前と俺の相性がいい。とかどうたら言ってた意味が、なんとなくわかった気がする」

「……？」

「……話してみても、わかった。お前、意外とおもしろい」

「………ふえ？」

そこで再び二人の会話は途切れた。

二人の視界には同時に、紅い幕が降りるのを捉えた。

それもどこに降りたと言ったことはない、全体を満たすように。ちよつと、さっきまで空間を支配していた闇が、その赤にとってかわるように。いや、まるで黒いなかに、紅い液体を染み込ませて行

くかのように。

ただ、視界が。暗闇の時よりも開けたのは確かだった。

その降りてきた紅が、月の光だと気づくのに。二人には少しの間が必要だった。

「…なにこれ…！」

紅く染まったようにすら見える自分の皮膚をみながら、ゆえは驚愕していた。

「おい、上を見る。こりやえらい事になっていやがる」

ゆつくりと減速し、空中で静止しながら、長春が上を指した。

ゆえはそれに続いて、長春の隣に静止し、その指差す方向を見た。そして、彼女はその赤い紅玉のような瞳を見開いて、それを見た。

大きな月が。血のような紅に染まっていた。

まるで数千年ワインに漬けられていたかのように。それは美しい紅に彩られている。

紅が、降っていた。

「なるほど、こりやブン屋どもがどんちゃん騒ぎするはずだ」

月を見上げながら、長春は独り言のように言った。

「絵になるもんな、こいつを写真にとったらさぞいい気分だろうよ」

「写真…？」

「ん？なんだお前、写真知らないのか？まあ俺も詳しいわけじゃねえけど。今度見せてやるよ」

ゆえは長春の言っていることがよく飲み込めず、首をかしげているが、空にある大きな紅い月を見上げていると、それはとても小さなことのように思えたのだった。

百聞は一見に如かず。とお師匠様が言っていたし、見るのを待つ

た方が理解がはやいだろう。と彼女は思った。

不思議と、お師匠様のことを思い出しても。ゆえは悲しくならなかった。

それが月のせいなのか、永遠亭を離れたことに慣れたからなのか、ゆえにはよくわからなかった。

しばらく、二人は立ち止まって月を見上げていた。

それくらいに、その月は妖しくも美しかった。

しかしその時間は長くは続かなかった。

ゆえは横目で、長春の目が細まり、素早くあたりを見渡すのを見た。

そして、軽く舌打ちをするなり。

「おい、降りろ。それで草陰に隠れてろ」

と短くゆえに言った。

「え、」

「他の見回りの奴だ、何でかしらんが俺らの担当地域まで出てきてやがる。いいから隠れてろ」

「う、うん」

「待て、影を二つにするとまずい。いいか？少し我慢しろよ」

そういうなり、長春は突然ゆえを抱きしめるような格好で首に手を回し、ぴったり体をつけて、抱えた。

「へ？え、え？」

「我慢しろ、ゆっくり降りるぞ」

長春は何事も無いようにそう言つと、ゆえをエスコートするように、もう片方の手でゆえの手を軽く握りながら、ゆったりと高度を落としていった。

そして、ふわりと地面に着地する。

「天狗は俺と同じで夜目は利かんやつは多い、影でしかこちらの姿を視認できない位置で気づけて助かったぜ。紅い月ばんばんざいだ……」

満足そうにそう言った長春は、すぐ横にいるはずのゆえを見てあ然とした。

ゆえはなぜか顔を真っ赤にしてへたりこんでいた。

「…何してんだ、はやくその辺の茂みに隠れてろ。上のやつは俺が何とか追い払う」

「……………」

「おい、」

「あ、うん。い、今隠れる」

「…？まあいい、俺がいつて言うまで息を潜めとけよ」

そう言うなり、長春は今度はかなり急速度で飛んでいった。

長春が飛んだ後も、ゆえは少しの間ぼーっとしていた。

ゆえは、人肌のぬくもりがあるものに抱きしめられたのが、久しぶりだった。

それは、彼女が姉のように慕う人しか、彼女にそんなことしないからであった。

その思い出に、すこしだけ浸っていたのである。

が、直後に彼女のその気分はどこかへ吹っ飛んだ。

今度は彼女の自慢の耳が、ガサツという、生き物が草をかき分けたときにしか出ようのない音を捉えたからであった。

「おい、てめえら。人の仕事場で何してやがる」

上空に素早く戻った長春は、上で見かけた別の哨戒天狗とおぼしき影に接近し、威嚇するようにそう言った。

言われた方の影は、どこかあたふたしていた。

見たところ二人組みの哨戒天狗のようであったが、長春は見たこともない顔ぶれであった。

赤い光に照らされたその二人は、どうも若い天狗のように見えた。

「おめえら、どこの所属だ」

「え…『河童』のほうの…小隊です…夜勤の途中で…」

「ああ？『河童』あ？」

不審に思った長春が問いたですと、案の定さっぱり違う管轄の天狗であった。

「こっちは『滝』の縄張りだよ、ついでにここは桜小隊の受け持ちだ。『河童』はもつと北が担当だろうが、何やってんだよ」

「す、すいません。夜勤は初めてで…暗くてよくわかんなくて…」

一人のほうがりがいなさそうにそういうと、もう片方がうんうんとうなずいていた。

長春ははあ、とため息をついた後。まあ説教をたれるのも筋違いだろうと思い直し。

「まあわかったわかった。慣れねえうちはしょうがねえ、さっさとめえのとこ帰んな」

「いや…あの…」

「あ？」

「帰り道…わかんなくて…」

「……………」

長春は文字通り絶句した。天狗は導きの専門家だろうが。

しかし、ここで二人をほうっておいて、さまよわせても仕方がない。長春にとつては、下にいるゆえのお守りが最優先であったが、この二人にゆえを見られるリスクを残すほうが危険であった。

「……しゃーねー…、『河童』のどこまで行けばわかるな？送ってやる、ついて来い」

「あ、ありがとうございます！」

あーあー、情けねえ情けねえ。と胸の奥でつぶやきながら、長春は二人がついてきているかを時々確認しつつ、北の方へ飛んだ。

そこでちらっと、うっかり三メートル以上離れるなという言いつけをやぶっていることに気づいたが、まあ、不可抗力だ。とその場は開き直すことにして。深く考えなかった。

この時、長春の飛んでいるちようど真下で。

妖怪の山を震撼させる紅霧異変の原因が、まさにうごめいていたことなど。

彼は夢にも考えなかった。

いや、妖怪の山の誰もが、そんなことは考えなかった。

ゆえは、息を潜めていた。

後ろに、茂みに隠れた彼女のすぐ後ろに。

得体の知れない何かがいることだけを感じていた。

恐怖で鳴りそうな歯を、あごごと手で押さえながら。

必死に恐怖と戦っていた。

皮肉にもその脅威に一番最初に気づいたのは、この山に迷い込んだ一匹の兎だった。

それにまだ、誰も気づいてなどいない。

紅霧の巻・其の四（後書き）

第四部。ここで紅霧の巻を切るつもりでしたが、切れませんでした。別段書く話を増やしたわけでもないのに予定の量を越えているので、要はただの構成力不足です（

今回のお話は、この巻の最終まで行く助走。

ラストまでの流れをテンポよくする役割ですが、はたしてそうなっているかどうか…。

勢い任せで不安ながらも、次回で紅霧の巻完結まで持って行くつもりです。

紅霧の巻・其の五（前書き）

紅霧の巻、最終章です。

はじめに断りますと、長いです。今までの一話分の長さの3倍はあります。

しかし長いからと言って劇的な展開があるのかというところでもありません（

今回は注意点として、多少の流血表現があります。規制をかけなければならぬほど残酷な表現にしていなつもりですが、苦手な方は心の準備をお願いいたします。

ともかくなんとかクライマックス、どうぞ

紅霧の巻・其の五

うさてん。く紅霧の巻・其の五く

『それ』、は明らかにゆえの背後に迫っていた。

ゆえは間一髪のところでもその足音を感知し、深い茂みの中に飛び込み、身を潜めていた。

文字通り、息を殺して。

ゆえには『それ』がなんなのか見る余裕などなく、隠れているのが精一杯であった。

ただ『それ』が、とてつもなく大きく、そして殺意に満ちているということだけがわかった。

このどうしようもない恐怖に、彼女は打ち負けそうになりながらも、なんとか気配を消しきっていた。

彼女が幸運にも『それ』を直視しなかったのも、原因したが、なんとか『それ』をやり過ぎすことに成功した。

もつともそれすら、強烈な殺意が離れていったのを確認し、もう感じられないほどに遠くへいったと認識して、それからもしばらく時間がたってから、ゆえはようやくやり過ぎせた、と安堵した。

しかし、足腰は立たなかった。

ゆえは臆病だが、恐怖を感じれば何にでも腰を抜かすほどの臆病さではない。

それほどまでに強大な何かが、ゆえのすぐそばを通り抜けていったのだ。

そこでふと、ゆえは不安になった。

自分を置いていった長春は、『それ』が来ることを察知していたのだろうか？

だがそんな疑問はもはやどうでもよく、とにかく早く長春に帰ってきてほしいとゆえは願った。

恐怖を押さえ込んでいた体が、とうとう耐え切れずに震え始めたのだ。

そしてそんな中、ゆえは背後で再びガサツという、生き物が草をかき分ける音を聞き取った。

ゆえは、耳がそれなりにいい。

その音が、長春たち天狗の履いている高下駄のものだと感知したゆえは、長春が帰ってきてくれたものだと思いで後ろを振り返り、茂みから顔を出した。

そして出るなり――、

「動くな！その妖怪！神妙にしろ！」

目前に立つ、天狗らしい男が、腰の刀に手をかけつつ、ゆえに迫っていた。

その天狗は、長春よりもずっと背が小さく、ゆえよりも少し高いくらいの背でありながらも、真面目そうで、融通のきかなそうな。どこにでもいる哨戒天狗であった。

しまったと思ったときには、もう遅かった。

ゆえは、他の天狗がゆえを見つけるといいう可能性を、さっぱり考えていなかったのだ。

「つたく、『河童』方の野郎ども。新入りだけに夜勤押し付けやがって、今度とつちめてやろうか」

長春は悪態をつきながら、ゆえを置いてきたところへ急いで飛んでいた。

先ほどの若い天狗二人は、上司の天狗に夜勤を押し付けられて、右も左もわからないまま見回りに出されたらしかった。夜勤はほとんど暗闇の中で行うために、天狗ならではの高度な方向感覚が必要

になる。それを仕込まないうちに夜勤へ出すとは、まさしく自殺行為である。

「せめて一人が指導についてやるもんだろぅが…」

納得がいかない様子でぶつぶつ文句を言う長春は、空を飛んでいなければ地面を踏み鳴らしていそうな剣幕であつた。

が、その時であつた。

長春は、空中で急停止し、反射的に刀の柄に手をかけた。

空中で構え、周囲を素早く警戒する。その目には何も映らなかつたが、長春は感じていた。

何を、とは今の長春には愚問であつた。

この日何度目かわからない舌打ちをした後、再び長春は高速で飛んだ。

その方向は、ゆえを置いてきた方向と寸分もたがっておらず。

長春の表情が、そこに何がいるかを物語っていた。

冷徹な剣士、一滴の暖かみも排除した目が、ただ前を見据えていた。

「どう？なんかいたー？」

「…いる事にはいたよ、こっちこっち」

ゆえは、後ろ手に縛られて、先ほど見つけられた天狗のお縄についていた。

その天狗もどうやら夜勤の途中であるらしく、相方の天狗を呼びに行ったところであつた。

どうやら二人一組で組んでいるらしい。暗い森の闇から、一人分の影が姿を現す。

「え、なにこれ。何捕まえてんの…」

「いや、…殺気がした方を探したら、茂みに居たんだよ…」

向こうの草陰からやってきた相方らしき天狗は、どうやら女性の

天狗らしい。椀と同じくらいの身長で、風貌もどことなく似ていたが、普通の刀を腰に下げているのみの装備なので、どうやら偉くはないらしい。とゆえはぼんやり思った。

見つかった後、ゆえは抵抗する間もなく取り押さえられ、後ろ手に縛られた。

取り押さえた彼が刀を抜いていなかったのが功を奏し、ゆえも泣き叫んだりということとはしなかったので、拍子抜けするくらいあっさりとは捕らえられてしまった。

ゆえの方からしてみれば、気が付けば縛られていた、みたいな感じであったが。

しかし本来なら慌てるべき事態なのに、どうしてもゆえには危機感が発生しなかった。それというのはやはり、先ほどの殺気にあてられて、少々感覚が鈍っていたのかもしれない。

「ていうかこれ、妖怪兎じゃない？ちよつとー、どさくさにまぎれて厄介なもの捕まえないでよー」

相方の方がゆえを指差してそう言った。

風貌は似ていても、けだるそうな雰囲気は椀にはない独特なものだったので、ゆえは椀がけだるそうにしているところを想像しておかしくなった。無論笑い出すのはこらえたのだが。

「げっ、あ、ホントだ！よく見たら兎じゃないか！」

縛った縄を持っている天狗が、今気がついたように言った。

「しっかりしてよー、大体あんたが殺気を感じたとか言ってるうちに来たんだから…どうすんのよ…」

「いや…でも殺気を感じたのはホントなんだって！」

「その結果がこれ？」

「う…いやでも確かに感じたんだよ…」

ぼうつと立っているゆえの前で押し問答を繰り返してしまつた二人を眺めながら、ゆえはぼんやりとこの先どうなるのかなあ、と考え始めた。

そうして、前の二人の先、森の暗闇をこれまたぼんやり眺めてい

た。

木々が作る、空よりもさらにうつそうとした暗闇。

ふと、そこでなにかが動いたような感じがした。

あれ、と思ったときにはそれはもう暗闇から姿を現しており。

木々の間から差し込む赤い光がわずかにその姿を幻想から現実の存在にした。

ゆえの紅玉のような澄み切った目が、今までで一番大きく見開かれ、その目に現れた『それ』を映し出してしまった。

息すらつまりそうな感覚に襲われたゆえは、何か声を発しようと思っただがそれも叶わなかった。

次の瞬間に、目の前に立っていた二人が高速で飛ばされるのが見えた。

ゆえに見えたのは、獣のような巨大な手が、目の前の存在を全て薙いだところだった。

ここで初めて、ゆえは音を聞いた。

薙いだ手が、木を倒す。聞きたくもない嫌な音。

それ以上に、飛ばされた天狗が木に衝突したらしく、そこで聞こえる生命が潰れる音。

ゆえは、耳がそれなりにいい。

全てが聞こえてしまっていた。

そして、聴覚からの情報を必死に拒絶して理性を保とうとするゆえは、その絶妙なタイミングで『それ』を見上げてしまった。

『それ』は、その辺にいきそうな熊を三倍くらいの大きさにして、狼のような頭に立派な牙を生やし、鷹のような爪を持ち、人間のようないく本の指を持った大木のような腕で、そして全身に何の毛だか知りたくもない毛皮を生やし、それが立派な脚を持って二足歩行しているような、世にもおぞましい生き物だった。

ゆえに当たるはずの月の光さえも遮り、先ほどまで天狗の二人が

いたところにまで近づいてきた『それ』を見たゆえは、動くことも出来なかった。

声も出ない、むしろ体に感覚があるかどうかも疑問に思えた。

ふと、少し前に長春と話した威嚇がどうたらこうたらという話を、ゆえは思い出していた。

ああ、怖いなあ――。

声に出したのかどうかわからなかったが、ゆえはそうつぶやいた。人生最後の現実逃避、俗に言う走馬灯のようなもの。

そして目の前の生き物がゆえを薙ぐため、大木のようなその腕を振り上げたのを見た。

その腕が落ちてくるのを見ながら、しかしゆえは瞬きもしなかった。

紅玉のような澄んだ目は、その化け物の先にある空に浮かんでいるはずの、同じように紅く澄んだ月を見ていた。

そしてその目は、どこを見ていたということを確かめられることも無く、潰されて割れる。

叩き割られる紅玉のように。

そのはずだった。

「……おい、てめえ。どこ見てんだ」

ゆえには、それが遠くで呼んでいる声に聞こえた。

そこでゆえはまだ自分の聴覚が生きていることを知った。

次に視覚が、目の前に広がる白を映し出していた。

そこでまたゆえは自分の視覚もまだ生きていることを知った。

次に、なにかが自分の体に触れていて、その暖かさが伝わってきた。

そこでゆえは自分の触覚もまだ生きているのだと言うことを知った。

「おい！聞こえてんのか馬鹿野郎！返事をしろ！」

「！」

ゆえは耳をつんざくようなその声を聞いて、心底驚いて身をびくつと引いた。

そこでまだ彼女は自分の感情が生きていることを知った。

目の前に、空を飛んでいたときにずっと見ていた、木の実を投げたのにそれをいともたやすく捕った、そんな大きい背中があった。視覚の情報から、自分はその背中ของすぐ後ろにいるらしいとゆえは判断した。そして自分は位置関係的にまだ立っているということにも気が付いた。

足の裏の感触から、まだ脚が残っていることにも気が付いた。気が付くと、手もしっかりついていた。

見るまでもなく、体のどこも欠けたりしていなかった。それどころか、なにかダメージを受けた痕跡すらなかった。

むしろ、茂みに飛び込んだときにすり傷を負った腕が、今さらひりひりしてきていた。

そして彼女は、自分が五体満足のままにいる謎を、その真実をようやく理解した。

目の前には、ゆえの体を背中でするようにしながら、大木のようなあの腕を鞘から抜いてもいない刀で受け止めて支えている男がいた。

ゆえは、もう背中だけでそれが誰かわかった。

「長春！」

名前を呼ばれた長春は、ゆえのほうを振り向かなかったが、それでもにやっと笑ったようだった。

鞘を抜いていない刀を両手で支えている格好でいるのだが、その

腕が小刻みに震えているところを見ると、こちらを振り向く余裕などないのだということがゆえにも痛いほどわかった。

「おい、ぼんやりしているところで悪いが、すぐに邪魔にならねえとこに下がれ。見りゃ分かんと思うが、そろそろ限界だ」

長春がわずかに震える声でそう言ったのを聞き取ったゆえは、全力で後ろに下がり、茂みを一つ越えて、素早く隠れた。それはまさしく、脱兎の如く。

ゆえが下がったのを確認してから、長春は刀を下ろした。

もちろんただおろしたわけではなく、自分があの大木の下敷きにならぬよう、受け流し、自らも逃れながら下ろしたのだが。

ずどん！

とその腕は、同じ太さの大木が倒れるよりもよっぽど威力のある音を出して、長春のすぐ横に落ちた。

その様子を見ながら、長春はしかし不敵に笑ってさえた。

それまで大木のような腕を支えていた刀と、その腕を交互に見た後、長春は刀を腰に戻し、鯉口に手を添えた状態で構えた。

その間に、まるで仕切りなおすかのように腕も持ち主が引き上げ、その異形の体を月明かりにさらすように、姿勢を正した。

今まで森に潜んでいたからなのか、木の背丈を越えないように移動していたと思われるその巨体は、姿勢を正すと高さの丈が妖怪の山に匹敵しそうですらあった。もっともそれは、それを足元から見上げる長春たちからの感覚なのだが。この時点で、うっそうと茂る森から頭一つどころではなく飛び出す巨大な化け物の姿が露わになった。

少なくとも自分の身の丈の五倍はあろうかという化け物と相対しても、臆することなく長春は声を張り上げた。

「おい化け物！よくもまあそんな図体でここまで来れたな！木が邪魔でしょうがなかったらう！」

そう叫ぶように言う表情は、笑っていた。

「…ふん、我々には己の図体を操ることなど容易だ。今も、貴様

らに見つからなければこんなところでこの姿をさらしたりはせんわ」
遙か上の方で、低くうなるような声がした。それを聞いた長春は、
少し驚いた表情を見せた。

「…へえ、言葉を解すのかい。でかくてバカ力な妖怪はたいてい
馬鹿で考えがないって相場が決まってるんだがな」

長春が素晴らしい終わらないうちに、上空から腕が降ってきた。

正確には、その化け物が今度は拳を長春に向かって振り下ろした
のだが。

ずどおん！

先ほどよりも高さを得たその攻撃は、先ほどまで長春がいたところ
にあまりに大きな穴を開けた。

その下敷きになっていれば、生前の姿を残すことなくぺしゃんこ
になっていただろう。

が、振り上げた腕を持ち上ても、その下には何もなかった。

ただ空しいクレーターが出来ているだけであった。

「…小さくなつてのこのこ忍び込んだのに、その姿にならざるを
得なかったってのは、俺が来るのを察知したからって訳か？俺のため
に全力を出してくれるとは、光栄だなおい」

その空しいクレーターに、長春はどこからともなくあらわれ、そ
の穴の中心にふわりと降り立った。

「違う」

大きい影は言うなり、紅い光を放つ大きな丸い月を見上げるよう
にして言った。

「この月が出るときが、我々の合図だっただけのことだ。そして
貴様らは、」

紅い光を気分よく浴びるようにしながら、大きな影は、自分が開
けた穴の中に、平然と立っている長春を見据えた。

「そこに偶然居合わせた、ただの不幸な奴らだよ！」

言うなり、空を仰ぐようにして腕を振りかぶり、それを振り下ろ
した。

しかし今度は、連続して、何度も。

腕が落ちた場所には最初と同じような穴が出来、木々は倒れ、土煙は舞い、付近の光景はすぐに荒涼とし始めた。

腕が落ちて地面がめくれかえるような音が続く中、長春は木々を伝ってうまく姿を隠しながら移動していた。

…こいつは、こつちが木に隠れるのが気にいらねえから、木を全部なぎ倒そうって考えなのか。

浅慮、長春はその行動を頭でそう評しつつ、素早く移動していた。そう考えた彼のすぐ横で、腕が落ちてきた。

ひととき大きな衝撃と音がした後、付近の木々が嫌な音をたてて倒れていく。

流石にあれば受け止められない、長春は舌打ちをしながらそう実感した。

「今すぐ斬ってやりてえところだが、せいぜい今は暴れてろ」
そう言いながら、彼はまた風を切るように移動した。

「はっ、はっ、はあっ」

走りながら、後ろを振り返る。

そこには、うつそうと茂っていた森が、巨大な影を中心に不毛の大地になっていく姿だった。

ゆえは長春に逃げろ、といわれた後、後ろ手に縛られた状態ながらも必死に走り。なんとか射程圏内から脱していた。

とはいえ、巨大な影が巻き上げた砂塵が、うつすらと降りかかってくる。

それが、まだ脅威が去っていないことを克明に告げていた。

まだはつきりと見える影が腕を下ろすたび、地鳴りがして、わずかに周りの景色が揺れる。

それを見て、ゆえは再び走り出そうした。

もう捕まってもなんでもいい、このことを誰かに伝えなくちゃ――。

ゆえの目には、単身であの化け物と向かい合う長春の姿が刻まれていた。

長春がどうやら強いらしいというのは、ゆえは柊から聞いていた。でも、あれはどう考えても無理だ。とゆえは実感していた。誰でもいい、誰でもいいから助けてもらわないと！

が、そう思いつめて走ろうとしたゆえに、思わぬ声が届いた。

「おい！お前！少し手伝え！」

ゆえの視線の斜め上から発せられた声は、ゆえがここ最近聞いた声にがっかりと一致した。

声のした方を見ると、今まさに木から飛び降りてきた長春が見えた。

どうやら木々を伝ってここまで来たらしい。

「長春！大丈夫だったの！？」

ゆえは驚きと喜びの混じった声で、着地した長春を歓迎した。

が、長春の背負っているものを見て、今度は声を失った。

「おい、手を貸せ。縄を切る」

長春は言うなりゆえの後ろに回り、脇差を抜いてゆえの縄を切った。ゆえは一瞬びくつとしたが、なんとか平常を保った。というよりは、背負われているそれが気になってしょうがないようだった。

ゆえの視線に気づいた長春が、それを下ろしながら説明する。

「おい、お前医術の心得があつたよな？この二人を頼む、見てくれてるだけでもいいんだ、預かってくれ」

長春が両肩に乗せて背負っていたのは、二人の天狗だった。最初に攻撃を受けた、ゆえを捕まえて押し問答をしていた天狗たちである。

それが今、ゆえの目の前で死んだようにぐったりとしながら横たわっていた。

「曲りなりにも俺たちは妖怪だ、このくらいで死にはしないだろうが…動けねえほどにやられたらしい。それに一人のほうは、俺があと少し早ければよかったんだが…」

長春は、女の方と思われる天狗の右足を見た。いや、正確には右足があつたと思われる方であつた。今、そこはひざから下にかけて紅い血糊がべつとりとついて、破けた袴から痛々しい傷口をさらしていた。

恐らく、あの化け物の第二波の攻撃にあたつてしまったのだろう。幸運にも直撃は避けたようだが、右足をもつていかれていた。

ゆえはそれを見て目を見開いたが、すぐに彼女の側にひざを付き、彼女の着物の袖を破つて傷を覆い始めた。

「とにかく止血を…布が足りないからどこまでできるかわかりませんが、何とかしてみます…！」

ゆえは強い口調でそう言った、その口調は決意の色が滲んでいていままでのゆえの口調とは似て非なるものだった。長春は、それに若干の驚きを感じながらも、ゆっくりとその場を離れようと歩き出した。

「…どこへ行くんですか？」

その動作を不審に思ったゆえがそう聞くと、長春は無表情で振り返った。

その目が、殺気に満ちていたので、ゆえは一瞬恐怖した。いや、殺気に満ちていたというのはゆえの勘違いであつた。ただ、あまりにも暖かみの無い目だったのでそう思つたのだらう。

それは冷徹な、目の前のものを斬るか斬らないかでしか判断しないような、そんな目であつた。

一筋の光も入ることを許さぬようなその目をゆえに合わせながら、長春は何のことはなしに言った。

「決まってるだろ、あの馬鹿を斬る」

最初それを聞いたゆえは、反対するつもりだった。

しかし、不思議とその言葉は彼女の口から出てこなかった。

反対する要素が、見つからなかったのだ。それは理屈ではなく、長春の言葉があまりに確信に満ちた、まるでもう決まった未来を起こしにいくと言っているような、何者の反論も許さぬ言葉だったか

らだ。

端的に言えば、神の言葉のようとも言えた。

何も言わないゆえに向かつて、長春は「頼んだ」と一言残し、また歩み始めた。

そして、茂みを一つ越えたところで、素早く飛んだ。

その表情は、笑ってすらいなかった。

「…なんだ、逃げたのかと思ったぞ」

自分の足もとを除くまわりの木が根こそぎなくなり、荒涼とした景色が広がる中、上機嫌そうな大きな影は低い声でそうつぶやいた。もう攻撃の射程圏内に木は一本もなく、視界は開けに開けきっていた。

こうなれば隠れた場所からの不意打ちもできず、射程内に入った敵を見失うこともない。そして小細工が使えなければ、まず自分が力負けするはずはない。

この戦術をとるからには、この妖怪にはそういう自負があった。そして己で作ったこれ以上にならない有利な状況に、先ほど仕留め損ねた、なまいきな天狗が飛んでくるのを見つけた。

正面から向かってくるのなら、これ以上に戦い易いことはない。大きな影はそう確信し、狼の顔をにやりとさせながら、大きく振りかぶって、天狗が攻撃圏内に入ってくるのを待った。

それが大きな間違いとも知らず。

「正面から来るその度胸は認めてやろう…だが、死ねえっ！」

うなりを上げながら、その腕を長春に向かつて突き出した。が、その腕がぴんと伸びきっても、手ごたえがまったく無かった。疑問に思った大きな影が、その手を引っ込め、あたりを見回したとき。

そのすぐ横で声がした。今までで一番近い位置からする声だった。「…剣士ってのはただの武術自慢じゃない。だから、斬り合う前

に、名乗るのが礼儀だ。名乗りも聞かずに攻撃するつてのは、無礼者にもほどがあるんじゃないか？」

明らかに、先ほどまで近づいていた天狗の声だとわかった。だが、大きな影はその姿を見つけ出すことは出来なかった。

しかし、どこにいるかはすぐに分かった。

「それと、攻撃の前準備でどこを攻撃するかバレバレだ。威力だけの攻撃は、妖怪としてうまいとは言えねえよ。どうせ長く生きてんだろ？知恵使え」

長春がいるのは、大きな影の肩の上、狼の頭のすぐそばであった。……貴様、いつの間にそこへ？」

「それ聞くか？別にてめえの攻撃をかわして普通に移動しただけだよ。特になにもしてねえよ」

狼の頭に寄りかかるようにしながら、長春は言った。

「安心しろ、お前が何を言おうが聞こうが、既にお前を生かす理由は無えから」

言葉が目に見えたなら、氷のように冷たい形をしているだろうと思うような。ひどく冷たい口調だった。

その言葉を聞いたからなのか、どうなのかはわからないが、大きな影は焦ったようにその腕を振るって自分の肩の上を殴った。が、これも空振りであるということは殴ろうとした本人が一番よくわかっていた。

そして、その振るった拳の上に、どういわけか平然と長春が立っているということも、見なくても本人が一番よくわかっていた。いや、わかってしまったというのが正しい。

「だから、名乗りを聞けつつうの」
感情がこもっているような、こもっていないような。よくわからない声だった。

確かに生き物から声が発せられているのだが、その声がひどく無機質のように感じられる声だった。

「天狗の里、『滝』の桜小隊所属の哨戒天狗。伏見伝世流中目録。

狼城の、長春だ」

特に何の感慨も無いように、長春はすらすらと言った。

「名乗り、終り。」

次の瞬間、音も無く長春の乗っていた拳が落ちた。
拳だけが落ちた。

そう思うと腕も続いた。

肩の先だけが落ちた。

次に頭が落ちた。

狼の頭だけが落ちた。

反対の腕も落ちた。

そう思うと今度は胴体が縦二つに割れた。

気づいたときには横にも割れていた。

次に足が三つにばらけた。

足首、膝、腰の付け根で別れた。

よく見ると腕も肩、肘、手首でわかれていた。

そしてただの大きな肉の塊になったそれは。

重力にしたがってただ落ちた。

この経緯は全で一瞬で行われたかのように見えたが、それは違った。

ただ誰も、彼の行動を見ていなかったただだった。

斬られた当事者が、いくらかのろまであったことも幸いした。

巨大な肉の塊が地上に降り注ぐよりも早く、彼はその巨大な塊をさらに小さくした。

そして彼と無数の肉の塊が地上に降り立ったとき。長春は、唯一原型をとどめている頭の部分につかつかと近寄った。

巨大な生首のようなその前で、長春は刀を持ったまま言った。

にやりと、冷たい笑みを浮かべて。

「輪切りと薪割り、どっちがいい？ 特別に選ばせてやるよ」
何も言わない狼の頭に。

「…両方か、よくわかった」

何のためらいもなく、刀を振り上げた。

「…けっ、これでしばらくは復活もしねえだろう。二度とここに
来ようとも思わねーだろうが」

木が無くなった部分に、無数の何かが落ちていた。

これが先ほどまで、この近辺であばれていた妖怪の「一部」など
と言ったとしても、誰が信じるだろう。

その中を、長春はゆっくり歩いていた。

刀は既に鞘に収めている。その白い着物には目だった血糊もついで
おらず、長春自身も傷を負った形跡は無かった。

しかし、ふと長春は足を止めた。

彼は、先ほどまでの余裕と打って変わって、目を見開いた。

「…クソッ！ どうなってんだ！」

空は相変わらず紅い月を映し出しており。

何の変化も無く、ただ紅い光を降らせていた。

「…がんばって…！ 早く逃げないと…！」

ゆえは、必死に逃げようとしていた。

長春が去った後、託された天狗二人はなんとか意識を取り戻した
のだった。

男の方は、今すぐ命に別状があるような負傷はなかったものの、
全身いたるところを骨折しているらしく、長春の言う通り動くこと

はできなかった。女の方は足をもつてはいかれているものの、上半身は比較的軽症であった。出血もなんとか抑えることができて、長春が戻ってきてから、しかるべき場所ですかるべき処置をすれば、死ぬことは無いだろうとゆえは見当をつけていた。

天狗二人が申し訳ないといった感じでゆえに謝辞を述べ、ゆえの方は、今はこれ以上の処置ができないことを逆に詫びた。

そんな矢先だった。

ゆえが、天狗たちが、先ほどの化け物と似たようなものが、無数の群れを為してこちらへ向かっているのを見たのは。

先ほど彼らを襲ったものに比べれば、その大きさは半分ほどであったが、それでも今度は数が半端ではなかった。

ゆえはとにかく逃げなければと思った、しかし、怪我人を置いておくことは無論、できない。

そこでゆえは意を決して、女の方の天狗を背負い、男の方の天狗と肩を組み、支えながら逃げることにしたのだ。

もちろん、その小さな体に二人分の重さを支えることなどできるわけが無い。これだけ重いと飛び立つのも至難の業である。彼らにできるのはじりじりと少しずつ歩くことだけであった。

天狗の二人は、もういい、どうせどんなに痛めつけられたって簡単に死にはしないさ、置いていってくれ。といったが、ゆえは首を縦には振らなかった。彼女には、怪我人を捨てられない理由があった。それは医療者としての覚悟であり、決意であった。彼女の師匠が教えてくれた、何よりも大切なことだった。

「がんばって……！あと少しだけ早く！」

ゆえは齒を食いしばって前へ進んだ。化け物の群れはもうすぐそこまで来ている。

一つだけ、彼女には希望があった。

それは他力本願な希望であったが、多少の現実味があった。

その証拠に、この天狗に怪我を負わせた化け物の影が今は無いことを、彼女は知っていた。

それだけを希望に、彼女は歩いた。

しかし、気づいたときにはもう、それ以上の絶望が取り巻いていた。

まさに逃げようとしていた方向から、あの化け物がやってきた。驚いて方向を変えると右にも、左にも同じ影があった。そして、後ろにはもう大勢の化け物が迫っている。

「うそ……」

囲まれたのではない。最初から、四方八方からこの妖怪の山を目指してやつらは来ていたのである。

逃げる場所がそもそも無いことを、ゆえは悟った。

そして彼らの背後に迫った化け物が、腕を振るうのを彼女は見た。今度こそ、彼女は終わったと思った。

しかし、そう思った彼女が感じたのは、なぜか腰に來た衝撃だった。それなりに強い衝撃であったが、どこかその一撃には暖かみを感じた。

その衝撃は的確にゆえの足腰の力を抜き、ゆえをその場に倒した。ゆえは支えていた天狗二人ごと、地面にどさりと倒れた。

「……よくやった、後は伏せてろ。ゆえ」

その声は、限りなく冷たかったが、ゆえには暖かく聞こえた。

その姿を見なくてもゆえはもうわかっていた。

刀が鞘走る音がした。

「長春……」

三度、その名前を呼ぼうとして顔を上げたゆえに、何か温かいものがかった。

その温かいものが、血であるということに、最初ゆえは気づかない振りをした。

それが、長春から出ているなどと、思いたくなかったから。

長春は鬼のように化け物を斬りまくっていた。そのあまりの行動

の早さに、ゆえは少しも長春の姿を追えなかった。しかし長春は、ゆえたちを守るように戦っている。四方八方から来る敵対しては、全力で戦えるはずも無い。

そう思ったゆえの頭上に、別の化け物が近づいてきた。

気づいたときにはもうゆえたちを見下ろすようなところに来ていた。ゆえはとつさに天狗たちのもっていた短刀を拾い上げた、しかし、それを抜いても意味が無いことを彼女はよくわかっていた。そして事実、別の理由から彼女は抜けなかった。

振り上げられた腕が、ゆえに再び恐怖を与えたその時、その腕はなぜか事切れたかのように地面に落ちた。

「馬鹿野郎！伏せてろって言っただろうが！」

長春が、ゆえと化け物の間に入る、その手には、ゆえの前で抜こうとしなかったあの太刀を握っていた。

片腕を失った化け物は、もう片方の腕で長春ごと粉碎しようとする手を振るってきた。が、その攻撃は長春が刀で受け止めた。

ゆえは長春の言いつけ通り地面にぴたりと伏せながら、長春を見上げた。そしてその手に光るその太刀を見た。いま化け物の腕を受け止め、その腕を切り落したりもしたその刀は、紅い光の中でも、赤い血にまみれようと、白く輝いていた。それはこの空間にとつて、ひどく異彩な白い光であった。

ゆえは、不思議とその刀をじっと見ている自分がいることに気が付いた。見ておかないと不安だったからなのかもしれない。しかし、それでもゆえがこの刃を見れること自体が本人も不思議に思う出来事なのであった。

が、それを深く考える前に、ゆえは長春の左後ろから、また別の化け物が迫っているのを見た。

「長春！後ろ！——」

そうゆえが叫んだときには、長春は先ほどまで腕を受け止めていた化け物の首から上を切り離れたところであった、そして左後ろに向き直り、向き直ったと思った時には、もう後ろから迫っていたそ

いつの首は飛んでいた。しかし、次の瞬間長春の着物から紅いものが噴出した。

腹の辺りから、着物が紅く染まった。長春が体をひねるようにして後ろを斬ったのをゆえは見た。さらに後ろからも化け物が来ていたのだ！

「ぐっそがああああああ！！」

長春は吼えた、背中から突かれたらしいその傷は、腹まで貫通しているらしかった。その着物は見る見る真っ赤に染まっていった。

ゆえは、それを見ていた。見ていることしか出来なかった。

そして思った、——なぜ？どうして、私たちを守るためにこんな戦い方をするのか？

天狗を、同胞を助けるため？

いや、それは違う。二人の天狗たちは、どうせ痛めつけられても簡単には死にはしない、とゆえに置いていくように言った。二人を助けるためなら、なにも囲まれて戦わざるを得ない状況になどないだろう。有利に戦える場所まで移動し、化け物を排除し切った状態で迎えに行けばそれでいい。二人はとうにこれ以上の負傷を覚悟しているし、問題は少ない。

なら、なぜ？

その答えはとうに出ていた。

長春は、あの言いつけを忠実に守っているのだ。

椀との、ゆえを守るようにといわれたあの命令を。

あの無茶な戦い方は、私を守るためなの——？

長春はもう数十体の化け物を斬っていた、その着物は血飛沫にまみれ、もう己の血なのか返り血なのか見当がつかなくなっていた。周囲には、斬った化け物の足だか手だか頭だかがごろごろ転がっている。

その中でまだ刀を振り回し、乱闘を演じている長春であったが、ゆえにもその表情から血の気が引いてきていることに気が付いていた。それほどに、負った傷は深いはずであった。

しかし、次の瞬間、ゆえは信じられないものを見た。
長春は、刀を下ろしたのだ。

敵がすぐ目の前にいる状態で。

ただ棒立ちになった状態の長春に、化け物が腕を振り上げた。ゆえがわけも分からずその光景を見ていたその時だった。

長春が少しも動かなかったのに、化け物の手が落ちた。

そして、長春の前に一人の影が現れていた。

その影は、己の背丈ほどもあるかという大剣を持ち、椀の紋が入った盾を持っていた。

長春よりもずっと体は小さいけれど、どこか安心感のあるその姿は、もはや誰と見間違えることも無かった。

そしてよく見ると、少し向こうの茂みに無数の白い人影が見えた。それらがわらわらと、いままで長春が一人で戦い続けていた化け物と戦っているのを、ゆえは見た。

その白い影が、長春たちの同僚、哨戒天狗たちであるということに気づくには、すこし時間がかかった。

「侘助！本部へ伝令！椀小隊より本部、重傷者三名、至急衛生班を派遣されたし！復唱！」

「了解。椀小隊より本部、重傷者三名、至急衛生班を派遣されたし。伝令向かいます！」

侘助は椀の命令を復唱し、どこかへ飛んでいった。

椀はそれを見届けた後、そばに棒立ちになっていた長春の体を抱きしめた。

そして抱きつくなり、叫んだ。

「馬鹿あ！なんで最初に連絡しなかったの！なんであんな無数の敵と一人で戦おうなんてしたの！し、死んだらどうするつもりだったの！馬鹿！馬鹿！」

「おい、痛い。椀、結構マジで痛い。やめろ」

泣きながら長春の腹にぐりぐりと頭をつける椀の抱擁が、傷にあ

たつて大分しゃれにならない長春が悲鳴を上げたが、それでも椛は容易に離れようとしなかった。

長春の傷があるところに椛の頭が来ているので、椛の着物や髪にまで血糊がついていた。

「……たく、血だらけになつてゐるぞ。だいたい、こんなんで死んだりしねえから安心しろ。ほら、離れろ」

「……やだ、ちゃんと衛生班に引き渡すまでこうしてるもん」

「何でだよ、別に逃げたりはしねえよ」

「逃げないけど、どうせ抜け出して戦おうと思つてゐるでしょ？」

「……」

「だめ、今日はもう下がって……お願い」

長春は頭をかきながら、あーあー、とバツの悪そうにつぶやいた。「……わかつたよ」

その後、しぶしぶといった感じでそう言った。

それを聞いた椛は、長春を見上げ、にこつと笑った。

一応微笑み返した長春のほうは、やれやれといった感じの疲れた笑みだった。

「ゆえちゃん！大丈夫！？」

その光景を離れて見ていたゆえだったが、その耳に懐かしい気さえする声が届いた。

声のするほうを見上げると、椛が空の向こうから飛んでくるのが見えた。

その姿がどんどん近づいてくるのだが、椛はさっぱりスピードを緩める様子は無く、着地できるのかな？とゆえが心配し出した段階で既にゆえの横を猛スピードで横切つて近くの茂みにつっこんでいた。

「椿ちゃん！だ、大丈夫？」

茂みから足だけ出てる状態の椿に、ゆえは心配そうにそう声をかけた。茂みの中からは「むごー！ゆえちゃん無事だったかーっ！もう大丈夫だからねー！」と必死に声がした。しかし足を必死にばた

つかせているところを見ると、茂みにはまって自分が一番大丈夫でないらしかった。

「ったく、ばかやろー。だからあんまスピード出すなって言っただろうが」

どうしようかとおろおろしているゆえの後ろから、これまた西北が空からやってきた。

そして足のみの姿になっている椿の前に立つなり。

「おい、そこから出して欲しけりや、『茂みの中から哀れな私めを救い出してください西北様』って言えば、助けてやらんことも無いぞ」

とか言いのたまった。

しばらく茂みに刺さった足がばたつきをやめ、思考しているのだと分かった。が、すぐに「ふざけるなー！さつさと助けるー！」と茂みの中から声がした。

それを聞いた西北はにやりと笑い、ばたつく足をつかんで。

「おーそいつは残念だ、じゃあお前は一生ここに突き刺さってる」と足を茂みに押し込んだ。中から抗議の声が聞こえたが、かまわず押し込み、椿の足は足首のあたりまでしか見えなくなった。

それを見て何を満足したのか、おし、とつぶやいた西北は、ゆえに向き直った。

「おう、うさぎさんよ。怪我は無いか？」

唐突に発せられた質問は、先ほど椿をからかっていた口調と大差ないにも関わらず、その表情は真剣そのものだったので、ゆえはそれに少し驚いた。

「あ、はい。私は大丈夫です、ちょっとすりむいたくらいで……」

ゆえは右ひじのあたりをさすりながら、そう答えた。事実、大した怪我はしていなかった。

それを聞いた西北はにかつと笑い。

「それなら大丈夫だな。悪いな、今椋は取り込み中だよ」

親指で西北が指し示す方は、長春と椋のいる方であった。誰も入

れない空間が広がっているのは、誰の目にも明らかである。

そして西北は、あたりの地面にころがっている腕やら頭やらの有象無象を眺めていた。

「それにしても相当な数の敵に囲まれたのに、よく無傷だったなお前さん」

多少感慨深そうに西北は言った。

「ええ、長春が…守ってくれたんです」

「…ははん、なるほどな。あいつらしいや」

ゆえの言葉に、一拍置いて西北は笑った。

「そうとう無茶な戦い方だったろ？」

ゆえは一瞬、なんと答えるべきかと思ったが。

「…たぶん、かなり無茶だったと思います」

「だろうな、これだけの敵に囲まれたらまず囲みから脱出することを考えるのが定石だ」

あ、火種がねえな、とか言いながらキセルを取り出した西北の言葉に、ゆえは多少の罪悪を感じていた。

「私がいなければ、そんな戦い方をしなくても済んだのに…」

つい漏れたつぶやきに対して、なんでもないように西北はからからと笑った。

「責めるな、むしろお前さんがいなくちゃあんな戦い方はできなかったんだ」

西北は慰めるように言ったが、ゆえにはその言葉の意味がよくわからなかった。

その様子を知ってか知らずか、西北はつけたすように言った。

「力のありすぎる奴はよ、その力を縛った方が逆に実力以上の力を発揮することがあるんだ。だから一部の超実力者の中には、己から縛りを欲する変わった野郎までいる」

ぽかんとしているゆえに、西北は続けた。

「お前さんは、長春のいい縛りだったわけだ。そういう意味で、私が長春を育てた！」って胸を張ってもいい」

言い終わるなり、西北はからからと笑った。ゆえには、その言葉が冗談なのか本気なのか、そもそも意味のある言葉なのか無い言葉なのか、さっぱりわからなかった。

ただゆえは、一つだけわかっていた。

ゆえが長春にとつて、西北の言う『縛り』にすぎないのだとしても。ゆえにとつては、もう長春はその程度の存在ではすまないということに。

何度もゆえの窮地に駆けつけ、その刀を振るった。その姿は、ゆえの脳裏に焼きついていていた。

こんなにも頼りになる人を、ゆえは知らなかった。

こんなにも強い人を、ゆえは知らなかった。

ゆえにとつて長春は、今までまったく知りえなかったタイプの人物であり。そして、また命の恩人でもあった。

そして、それとは別の感情もまた、芽生え始めていた。

まだまだゆえ本人はその感情を知覚するにはほど遠かったものの、この時からうつすらとゆえのなかに、ぼんやりとした感覚として居座り始めた。

この時はまだ、椀と長春が抱き合っているところを見て、すこしだけうらやましそうに思ってくるものだったのだが。

これがもつとずっと大きくなるのは、火を見るよりも明らかであった。

でもそれはまだ、先のお話。

妖怪の山の異変は、これで終わってなどいなかったのだ。

「『文々。新聞』号外だよー、これを読まなきゃ明日は無いわー」
遠くのほうで、そう声がしたかと思うと。洞窟の入り口から何かが飛んで入ってきた。

ここは滝の裏にある、椀小隊の待機洞窟。

まだ深い紅い霧に包まれた空気の中、椀小隊全員が洞窟内でくつろいでいた。

「あーもう、また文様がところかまわず新聞を配り歩いてる……」
自分の足元まで転がってきた新聞を手取るなり、椀は愚痴っぽくそうつぶやいた。

「私たちはあれから警戒強化で見回りの日々なのに……文様はいつでも新聞つくって気楽なんだから……」

「ま、それが鴉天狗のやることだろ。新聞作ってなにが楽しいんだかしらねえけどな」

椀がそうばやくのにあわせて、椿と将棋を指している西北が同調する。椿の方は相変わらず将棋に熱中していて会話に入る気配もない。

「それで、新聞の内容はどうなってます？ 椀さん」

少し離れた位置で読書をしていた侘助が、新聞を広げた椀に聞いた。

椀はざっと一面を読んだあと、首を横に振ってから答えた。

「相変わらずの嘘っぱちだよ。『無数の巨大幻獣、天狗の里に襲来！ 紅い霧が原因か』っていう見出しまではいいけど、本文になると、幻獣の群れを最初に発見したのは『河童』の方の管轄の子になってるし、『滝』の管轄で大暴れした一回り大きい奴についての記述はゼロ。最後は哨戒天狗を指揮した大天狗を賞賛する内容で終わってる。最終的に幻獣がどうしてこの山に襲い掛かってきたのかとかの原因に関してうやむや、なんていうかもう、ここまでくると清々しいよ」

椀はため息をつきながら新聞をたたんだ。

「やはり、長春の記述はなしですか」

侘助がそう聞くと、ひときわ大きく椀はため息をついた。

「まあね。長春は大天狗様から嫌われてるしなあ、大天狗様に近い文様の新聞だったら、それをもみ消すのは当然でしょうね。間違

いなくあの戦いで一番活躍したのは長春だったのにな」

「だな、長春が一人で敵をまるごとひきつけたお陰で、『滝』の戦力だけで敵を包囲できたからな。功績はでけえだろう。それに加えて天狗二匹とおまけの兎一匹を守りぬいた、それが恩賞もお褒めの言葉もなしで、もらったのは包帯くらいか、なあ長春？」

西北はそう言つて将棋盤から顔を上げ、長春の姿を探したが、洞窟内にその姿は見つからなかった。

「ありや？あいつどこ行つた？」

「あれ、さつき言わなかったつけ。散歩、体動かさないと落ち着かないんだつて」

「おいおい大丈夫かよ、あいつ一人で」

「ゆえちゃんがついてるから大丈夫。だいたいまだ傷もふさがつて無いし、無理はしないでしょ」

椀はそういうと、すくと立ちあがつた。

「さ、私たちも行こうか！そろそろ見回りの時間だよ！」

「うげ、またかよ」

「文句言わない、まだ非常警戒態勢なんだから」

心底嫌そうな顔をする西北にたしなめるように椀が言った。

そこに侘助が、本を閉じながら加わる。

「哨戒・鴉天狗合わせて重傷者50名以上、負傷は100名をゆうに超える大損害でしたからね。一部では死人も出たつて話もありますし」

侘助の言葉を聞いた椀は驚いたように問い返した。

「えつ、そんなに負傷者多かつたつけ……？」

「新聞に出てる数字は、行動不能になるまで痛めつけられた者のみを負傷者であつかつてますから。長期戦線離脱者の実数ははるかに多いです。……まあ、死人が出たというのも含めて、この事件ごと隠蔽されるでしょうが」

「隠蔽されるう？こんなでかい事件がかよ？いや、これはもう戦争だろ」

侘助はゆつくりとうなずきながら、西北に向き直った。

「そう、戦争だからまずいんだよ。知らない？ スペルカードルール」

「なんだそれ」

真顔で心底知らないという顔をした西北に、侘助は多少あきれながらも続けた。

「大天狗が嫌ってる、妖怪の賢者が定めた新しい幻想郷のルールだよ…。争いごとになっても、血を見ないために制定されたばかりなんだけど。制定された矢先に、双方ともルール無視の戦争やっちゃったからやばいんだってさ」

「先の戦いで大損害が出る上に、ルール違反で妖怪の賢者からうだうだ言われるのがいやだってわけだね…」

納得したようにつぶやいた椛に、にこりと笑いかけながら侘助がうなずいた。

「ええ、ですから。明日にはその記事もなくなりますよ。まあ僕たちは黙っていれば、何も影響は無いでしょうしね…」

どこか遠くを見つめるように言った。

「…なんかよ、気にいらねえな」

「…ま、しょうがないよね」

腕を組んで苦虫を噛み潰したような顔をする西北と、同じように納得はしていない感じの椛が二人してつぶやいた。

そしてそこへ、三人の鼓膜をつんざく声が響いた。

「西北ー！ 早く次の手させー！！ 待ちくたびれたぞー！」

将棋盤の前で鎮座していた椿が耐えかねたようにそう叫ぶのと、耳を押さえながら西北のゲンコツが飛んでくるのがほぼ同時であった。

その後は、たいていいつもと似た光景で。

変わったことなど、何もなかった。

「…けっ、ふざけてやがるよ。鴉天狗の奴ら」

長春は、持っていた新聞をどこかへ放り投げながら、吐き捨てるようにつぶやいた。

あたりはうつすら紅い霧が支配しているが、視界が完全に無くなるほどではなかった。その中で、数日前まで天狗と幻獣による地獄絵図のような戦闘があったことは、まだ記憶に新しい。

長春が進む森の中には、草がめくれかえって哀れにも土肌を露出しているところがいいたるところにあり、木が倒されているところもあった。

戦闘の爪あとは、確実にこの山にも刻まれていた。

そしてそれは、長春の体にもまた然りである。

紅い霧と紅い月。元々紅い霧には妖怪の気を増幅させる効果があり、それが紅い月の光によってさらに増長する結果となったようだ。力を増大させ、自分の個体すらコントロールできなくなった妖怪どもが、偶然にも妖怪の山に近いところに集まり、興奮した妖怪どもが月を見て、一番高い妖怪の山を目指して大行進を始めた…はん、馬鹿と煙は高いところがお好き、とはよく言ったものだ。

長春はゆったりとした足取りで歩きながら、侘助から受けた説明を思い返していた。

怪我の治療を受けたあとも、なんであんなやつら（後に幻獣、と呼ばれるやつらなのだ）と判明した）が来たのか、さっぱり理解できていなかった長春は。下手に偉い奴に聞くより侘助に聞いた方が早いと知っていたので、侘助にことの次第を正した。

侘助は「推論と、人から聞いた話を織り交ぜた仮説だけど」と断った上でそう語ったのだ。

この馬鹿新聞に書いてあるくだらない記事よか、侘助の意見のほうがよっぽど有益だぜ。と長春は胸のうちでつぶやいた。

後ろの方で、がさつと音がした。長春はそれが新聞紙を拾う音だとわかり、誰が拾ったかもよくわかった。

「おい、ゆえ。そんなもん拾ってどうするつもりだ」

長春が振り向いて、新聞紙を今拾い上げたその少女に言った。

ゆえは上機嫌そうに新聞紙を自分の肩掛けかばんに入れ、長春の横にとてとて駆けてきた。

「長春は別にいいのかもしれないけど、新聞紙って意外と役に立つんだよ？」

にこにこしながら言うゆえの顔を見ながら、長春は不思議な感覚でいた。

あの紅い月と化け物が支配した夜、確かに長春はゆえを守った。その恩返しと言ってあの後長春にずっとくっついて、時として小言を言ったりするものの、背中の中の傷の様子を見たりだとか、包帯の取替えだとかをやってくれるのはいつもゆえであった。最近では、森を散策して薬草を集め、塗り薬まで作ったりする。

本来なら、他の哨戒天狗連中があの日ゆえを見た日から、ゆえの居場所はなくなったはずなのである。

しかし、ゆえは負傷した天狗二人を背負って幻獣から逃げようと必死に試みた。自らは戦闘能力のほとんど無い妖怪鬼であるにも関わらず、身を挺したその行動が助けられた二人によって広まり、少なくとも哨戒天狗の連中からはゆえは認められた存在となりつつあった。

もつとも、大天狗などには当然ばれるわけにもいかない。その存在が公認されたわけではないが、同胞を救った恩人として、またその不幸な境遇に対する同情も相まって、桜小隊に住み着くゆえという存在は容認、あるいは黙認されつつあった。

長春としては、きっかけが自分の不始末であったことが、少なからず周囲に認知されるのが気恥ずかしい反面、逆にその不始末をおっぴらに責められる空気で無いことが幸いであったりした。

正直、こうなることが良いことなのだと断言できる自信が無かった。

しかし、紅い霧の異変が解決した後もゆえがここにいられる理由がないということに、長春は一抹の不安を覚えてさえもいた。

それがなぜだかわからなかったが、ゆえの屈託の無い笑みと、おっとりとして時々間抜けな物腰が、既に椋小隊の一部となりつつあるのだという事実が、その感情を生んでいることに、うつすらと長春は気づいていた。

「なあ、ゆえ」

自分の少し前を歩く、桃色の衣装を着た少女に声をかける。

「何？」

振り向いた少女は、不思議そうな表情に、うつすらと微笑みをのせていた。

紅い霧など気にならない、ただそこに、この少女がいるという感覚。

「お前、この霧が晴れたら、俺らのところ出て行くのか？」

長春の質問に、ゆえは少し驚いた表情を見せたが、すぐに微笑み返して答えた。

「うん、だって最初はそういう約束だったじゃない。ちょっとさびしいけど、そうすることになると思うの」

「そうか…」

少し力が抜けたようにつぶやいた長春が気になったのか、ゆえは長春の表情を覗き込むようにしながらじっと見守っていた。

長春は気が付かなかったが、ゆえの表情はまるで、次に長春が何を言うのかわかっているようだった。そしてそれが、彼女にとってこれ以上ないうれしい申し出だと言うことも――。

「おい、もし俺らのところから出て行って。他に行くあてが無くてもどうにもダメだったら。…椋に泣きつきにこい。少なくとも俺たちはお前を歓迎してやるし、他の奴らに文句は言わせねえ」

ゆえの表情が、ぱっと輝いた。

「うん、ありがと。そうする」

満面の笑みを浮かべて、言う。

「じゃあここからは私のわがままだけど、」

「行くあてが出来て、住む所が別に決まっても。わたし、ここに遊びにきてもいい？」

長春は、につ、と笑った。

それは硬い笑みだったが、彼の表情の中では一番にいい表情だった。

「はっ、仕事の邪魔にならないようにすればな」

ゆえは、思い切り息を吸い込んだ。

「うん！もちろん！」

二人が出会ってから、まだ時は流れて間も無い。

だが、今この二人は、初めて腹の底から笑い合っていた。

たいして言葉をかわしたわけではない、たいして触れ合ったわけではない。

しかし、二人の間には目に見えない信頼のようなものが、既に出来ていた。

それは信頼というにはまだ儚いものであったが、確実に二人を結んでいた。

結び目は、次第に大きなひづみを伴って。

この幻想郷に、大きな騒乱を巻き起こす。

そうとも知らず、ここに二人は。まだひとかけらの苦しみも無い、幸せな二人が、笑い合っていた。

紅霧が晴れる日も近い。
夏のある日の話であった――。

紅霧の巻・其の五（後書き）

これにて紅霧の巻は完結です。ですが当然の如く、うさてんの話自体はまだ始まったばかりです。

紅霧異変の次とくれば、春雪異変と相場が決まっておりますので、こちらもそのつもりです。しかしまあ、そこは二次創作らしく、春雪異変の話を書く前に、その幕間の様な形で、一種のブレイクタイムのようなお話を一二個書きたいなとも思っています。

どれくらいのスピードでお話の続きを書けるのか、今のところは不確定なところも多いので不定期の更新になりそうですが、ここまで読んでくださっている皆さんには、できるだけ早く続きをお見せできればなあと。

というかそれ以前に、紅霧の巻自体に不確定な事が多くて読んでいる方が閉口しているかもしれませんね。作品に関する「ここってどういうことなの…」という疑問は、感想等の方法で作者にぶつけて下さればお答えしますので、お気軽に罵声をおよせください（

幕間・十代目阿礼乙女雑記帳（前書き）

幕間です。その名の通り本編とはさっぱり関係があつたりなかつたりするお話です。いえお話ですらないかもしれません。

基本的に本編で扱うこともない雑多なネタとかを、幕間として書いていこうかなと思ってます。

幕間・十代目阿礼乙女雑記帳

うさてん。〈幕間・十代目阿礼乙女雑記帳〉

さて、この本を開いたものが、一体何を求めてこの本を開いたのかは知らない。

仮にも名家である稗田家の十代目当主の書いた雑記帳なのだから、何かたいした事が書いてあると思って開いたのかもしれない。

残念ながら、その思いには答えられないということを事前に断っておこう。

書いている本人がこういうことを序文で書くのもおかしいと思うが、これは真正正銘の『雑記』帳である。

書いている内容は、私の過ごした日々を書きとめているという点では『日記』に近いかもしれないが、『日記』とはあまり言えない。私の知る限り『日記』とは毎日毎日、日ごとに起こったことを書きとめる、いわば自分の歴史書のようなものを自前で作ってしまうような作業だが、これはそれとは違う。

私は現に幻想郷縁起を編纂する作業に忙しく、正直日々起こったことを書きとめるほどの時間的余裕は（惑いは寿命的にも）無い。

そもそも、自分のために何かを書き記すという行為自体が継続できるか怪しくすらある。

そのため、この雑記帳は気が向いたときに、気が向いた内容を書き留めるものとする。

全ては気が向いたとき、すなわち都合がいい時にのみ書くので、何か書いている途中で飽きたり、忙しくなったりして投げ出すこともあるだろう。

そんなわけで、この雑記帳に書かれていることは誰に何を伝えるという意志はまったく何も無いということを書いておく。

そもそもこの雑記帳の概念からして、恐らくは大半の内容は途中で終わっていたりするはずだ。

もしくはあまりに断片的な語句をつなぎ合わせただけの文もあるかもしれないし、ひよつとすると暗号のように見えなくも無いものを書いてるかもしれないし、時として習字のようなことを突然書いているかもしれない。

この雑記帳は、いわば私、阿礼乙女の筆休めのようなものだ。

私が編纂する義務を負っている幻想郷縁起は、私の意志で書いているわけではない。

もちろん私も必要ないと思って書いている訳ではないのだが…。

むしろ求められて、「作ってくれ」という期待に答えて書いている部分が多く、自分の書きたいことを書く機会にはあまり恵まれな

いというのが実情だ。

せいぜい、幻想郷縁起巻末の独白くらいなものか。まあ、それ以外の内容も結構好き勝手書かせてもらってはいるが。そこは、せっかく書いているんだからこれくらいはいいだろうという了見でやっている（悪いとは寸分も思っていない）。

要約すると、何の目的意識も無く、ただ気が向いたら何か書いておくという概念の本だと思ってもらえればいい。

おそらく書く内容は本当に雑多で混沌としているだろうし、ほとんどは尻切れ蜻蛉とんぼで終わるものが大半だろう。

だが、ここに私が書いたという事実は変わりが無い。

こんなことをだらだらと書いていて、最後によくわからないことを言うようだが、おそらくそれが一番大事なことで、私がしたかったことなのだと思う。

ここでの私とは、先代を含めた御阿礼全員の意思である私のことだ。

私の意志で書いた本で、私の意志で内容が決まり、私の気分で完成度も違ってくる。

これはもはや『私』と言っても差支えが無いのかもしれない。

そう、私の『歴史』でもない、私の『義務』でもない。『私』を記したのがこの雑記帳だ。

どつやらうまいことにまとまったことが書けたので、これをもって雑記帳の序文とする。

うまい、まったくもって私うまい。これは名序文だわ。

十代目阿礼乙女 稗田阿十

ああ、なんと言つか、もう少し大人な体型の体が欲しかった。
ていうかすごく欲しい。

里のじいさんから幻想郷縁起を催促される。今やってますうー！。

なんか鳥の妖怪がやってきた、なんか朱鷺っぽい色した奴。

頭悪そうだったけど話し聞いてあげた、意外と話の分かる奴だった。

縁起に載せて貰いたくて来たらしいけど、本好きって特徴だけじゃ載せられないなあ。

それでも粘るので、鳥妖怪の関連項目に「本好きの者もいるらしい」と書いてあげた。

そしたら喜んで帰った。なんなの。

九代目のスクラップ帳みたいなの出てきた。

自分が生まれたときの新聞はさんでやんの、前代は収集癖でもあったの？

わー、かつこつけたポーズ撮られちゃって。

それにしても『文々。新聞』ってどこの新聞だろう。

あとなんかくしゃくしゃのメモもはさまってた。なんか電波なことを書いてある。

…前代はこういう趣味もあったのかしら？

あの兎、薬の説明がすこしうまくなった。

風邪を引くと私はどうも鼻からくるらしい。

鼻づまりいらいら。

あのあと、気が向いたときに同じところを探したら、新聞のスクラップがたくさん出てきた。

全部『文々。新聞』というところの新聞だ。

どこの新聞だろうと思って家の人に聞いたが、知らないという。ちなみにうちでは『幻想共同通信』という新聞をとっている。

そういや九代目の縁起読んでなかった。

いっけね、バチがあたっちゃう。

よく見たら『文々。新聞』の記述があった。天狗の新聞らしい。

でも今無いのはなんでだろう？

深夜。虫の声うるさい。

起きてしまったから、9代目のスクラップでも探すことにする。

そう思ったけど灯りが蠟燭だけだし、暗いからやっぱりやめた。

変わった客が来た。

人間のようだけど、じじいみたいに催促に来たわけでも、妖怪のように縁起に載せてくれと頼むわけでもなかった。

会うなり「天狗の里について書かれた本を見せてくれないか、少しでも出てればなんでもいい」と頼まれた。

家の人に頼んで、いろいろ出して見せてやったが、めばしいものは無い様子だった。

せめてどんな内容のものが見たいのか言ってくれば、生き字引の本領発揮というものだったが、生憎のことそいつは本の内容はわからないようだった。

そもそもそいつの正体もよくわからなかった。人間なのか、妖怪なのか。

出された本を全部見ても、めばしいものはなかったらしかった。

そこで私は、天狗の里について書かれた本というわけでは無いが、妖怪兎と天狗について書かれた本を思い出した。

もつとも、それは資料と呼ぶにはあまりにも感情的に記されているために、本来の資料庫におかれず、私のこの雑記帳と同じように、文机の横にそつと置いておいたものだ（ちなみに、9代目のスクラップもたまに見るとおもしろいので、文机の横に置いてある）。

その本は、ひよつとすると九代目が書いたのかもしれない、と言われる本だった。というか私は九代目が書いたと半ば確信している（理由は諸々あるが）。

その文面は、まるで物語のように感情的で表現豊かに記されている。

ひと目読むだけで、これはこの稗田家にある膨大な資料とは、その趣を異にするものだと思われるものだった。

私は面白半分、冗談半分でその本をそいつに差し出した。

まあ、どういう経緯を経たとしても、すぐつき返って来るだろうと思っていたのだ。

驚いたことにそいつはその本を食い入るように読み込み始めた。

そして、陽がだいぶ傾いた頃になって、全部読み終えたらしかった。

そいつはその本をどこかうれしそうに眺めながら、本の外観を念入りに観察していた。そして表紙をめくり、次に奥付けを見た後。

「この本、題名は？」と聞いてきた。

ない、と私は答えた。事実その本には名前がなかった。表紙は真っ白で、ついでに言うところ作者名も書かれていない。

「それじゃ、『うてんれんわ兎天恋話』っていうのはどうだ？」そいつはまるで、始めからその本に名前をつけるために、ずっとその台詞を言いたいがためにここに來たかのように言った。

私は驚いた。

何に驚いたのか、自分でもよくわからなかったが。

ひょっとすると前の『私』。先代の誰かが、そいつを知っていたのかもしれない。

それからそいつはしばらくして、帰っていった。去り際に「ありがとう、ありがとう。あんたのおかげで助かった」と何度もお礼を言われた。

そして最後の最後にそいつはこう言った。

「九代目によろしく」

私にはその言葉の真意は汲み取れなかった。

しかし、そいつによって『兔天恋話』と名づけられた。白紙表装の本を眺めていると。どうもこの本に名前を、それもどこの馬の骨とも知らない奴につけられたというのが気に入らなかった。

そこで私は、何もあいつの付けた名前を、そのまま使ってやるものかという、どこから沸いたのかわからぬ対抗心に燃え。

本の下の方ににじまないようにしながら、表紙に筆で題名を記した。

だいたい『兔天恋話』なんて四字も漢字つかって堅苦しいったらありやしない。まるで資料みたいじゃない。と不満だった私は、とりあえず全てひらがなにして、さらに題名全体を省略することにした。

いろいろ試行錯誤し、記した。

『うさてん。』と。

相変わらずネーミングセンスが抜群ね、私。

これならきつと九代目も喜んでるわ。

幕間・十代目阿礼乙女雑記帳（後書き）

本編の続きはもうちょっとかかりそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8481o/>

うさてん。

2011年10月7日00時32分発行